

古代史シンポジウム

徹底解剖！

沖出古墳とその被葬者像

福岡県指定史跡「沖出古墳」

の最新研究成果を紹介

—オンライン座談会の記録—

2021 嘉麻市教育委員会

古代史シンポジウム

徹底解剖！

福岡県指定史跡「沖出古墳」の最新研究成果を紹介

沖出古墳とその被葬者像

—オンライン座談会の記録—

序

延長 61 k mに及ぶ遠賀川は、古より豊かな文化を育んできました。遠賀川流域には、前漢鏡を多数副葬した飯塚市の「立岩遺跡」、装飾古墳の白眉と称される桂川町の「王塚古墳」などの著名な遺跡をはじめ、古代の繁栄を偲ぶことができる遺跡が数多く残っており、本市にも弥生時代の有力集団墓である「鎌田原遺跡」、遠賀川流域の王墓と呼ぶにふさわしい「沖出古墳」が福岡県指定の史跡として保存されています。

令和 2 年 2 月 22 日、遠賀川流域を代表する史跡である「沖出古墳」をテーマにした古代史シンポジウム『徹底解剖！沖出古墳とその被葬者像』を開催する予定としていましたが、前々日に福岡県内で新型コロナウイルス感染症罹患者が確認されたことを受けて、感染拡大防止のためにやむを得ず中止としました。その後も日本全国で新型コロナウイルス感染症の流行が続き、全国のさまざまな文化イベントが縮小、中止へと追い込まれていきましたが、そうした最中、シンポジウムのコーディネーターを依頼していました古谷毅氏（京都国立博物館）より開催中止となったシンポジウムの代替として、オンラインによる座談会形式のシンポジウム開催のご提案を受けました。シンポジウムにご登壇をお願いしていました講師の皆さまからのご厚情を賜り、令和 2 年 10 月 25 日にオンラインによる座談会形式のシンポジウムを非公開ではありましたが、こうして実現することが出来ました。

本書は、講師 3 名の皆さまにご執筆いただきました令和 2 年 2 月発刊のシンポジウム予稿集に座談会の内容を追録した古代史シンポジウムの記録集です。開催中止となったシンポジウムを心待ちにしておられた皆さま、準備を進めてこられた講師の皆さまには、多大なご迷惑をおかけいたしましたこと、あらためてお詫び申し上げますとともに、現在もコロナ禍によりさまざまな文化活動が停滞している中で、本書が人々の心を豊かにし、当地域の歴史文化研究の発展の一助となることを切に願います。

令和 3 年 3 月

嘉麻市教育委員会

○ プログラム ○

○発 表

- 13 : 00～13 : 30 発表 1 「沖出古墳」の調査（嘉麻市教育委員会 上野智裕）
13 : 30～14 : 00 発表 2 埴輪からみた沖出古墳（大阪大谷大学 犬木努）
14 : 00～14 : 30 発表 3 石製品からみた沖出古墳（宮内庁書陵部 清喜裕二）
14 : 30～15 : 00 発表 4 北部九州の首長墳と沖出古墳（別府大学 田中裕介）

〈 休 憩 〉

○座談会（討論）

- 15 : 15～17 : 00 沖出古墳をめぐる諸問題（コーディネーター：京都国立博物館 古谷 毅）

○ 本文目次 ○

沖出古墳の概要	1
○発表資料	
発表 2 「埴輪からみた沖出古墳」 犬木 努（大阪大谷大学）	9
発表 3 「石製品からみた沖出古墳」 清喜裕二（宮内庁書陵部）	19
発表 4 「北部九州の首長墳と沖出古墳」 田中裕介（別府大学）	29
○用語解説	39
○座談会の記録	
発表 1 「沖出古墳」の調査 上野智裕（嘉麻市教育委員会）	41
座談会「沖出古墳をめぐる諸問題」	43

沖出古墳の概要

1 古墳の調査と古墳公園の整備

沖出古墳は、昭和2年に「筑前漆生の古墳群」として学術雑誌に紹介されるなど、その頃には地元でも「瓢箪塚」や「瓢塚」と呼ばれその存在が知られていました。また、沖出古墳の周辺には銅鏡を出土した石棺墓、短甲（鉄製のよろい）や金銅装の馬具を出土した円墳、形象埴輪などを出土した前方後円墳など貴重な墳墓群が存在していました（図1）が、いずれも石炭産業による鉱害復旧工事のため土取りの対象となり、沖出古墳を除いて適切な調査がなされないまま消滅してしまいました。

こうしたことから、稲築町では、昭和57年に『第二次稲築町総合計画』の中で沖出古墳の土地公有化と整備の指針が示され、町教育委員会によって沖出古墳保存のための基礎資料作成と学術的価値の評価を行うことを目的とした発掘調査が昭和62・63年度に実施されました（第1次調査）。本調査により古墳の規模と時期的な位置付けなどが明らかとなり、その成果は調査報告書（『沖出古墳』稲築町文化財調査報告書 第2集）にまとめられています。

その後、平成4年の『第三次稲築町総合計画』基本計画（前期）及び平成8年の基本計画（後期）において、沖出古墳の具体的な整備と活用の方針が示され、平成9年に福岡県の指定史跡となり、保存整備を目的とした発掘調査が平成9・10年度に改めて実施されました（第2次調査）。

平成12年、これまでの調査成果を受けて、小田富士雄福岡大学教授（当時）を委員長とする「沖出古墳及び周辺整備指導委員会」が設置され、平成13年1月に基本設計、同年6月に実施設計が策定されました。その中で、墳丘については調査成果に基づき全面復元を行い、埋葬施設については立入公開ができるような保存整備とする方向性が示されました。また、周辺環境については、古代の雰囲気を損なわない植生の再現を目指し、その中で郷土の歴史文化を学ぶための生涯学習の場としても活用できるようガイダンス等の施設整備を図ることとなりました。こうした整備方針に基づき、町は平成13年8月に沖出古墳公園の整備工事に着手し、平成15年2月に古墳公園が竣工しました（写真①・②）。

現在は、地元小学校の遠足のほか近隣自治体と共同で実施している春と秋の「遠賀川流域古墳等同時公開事業」などにおいて、嘉麻市内外から多くの人々が沖出古墳の見学に訪れています。

2 古墳の概要

墳丘と埋葬施設：沖出古墳（嘉麻市）は古墳の大きさ69.5m前後、後円部の直径42.4mの前方後円墳と推定されています（図2）。後円部の直径については、同じ嘉徳盆地で沖出古墳より先に造られた大型の円墳である忠隈1号墳（飯塚市）とほぼ同じ規模で、沖出古墳の築造にあたって忠隈古墳の大きさが意識されていた可能性もあります。沖出古墳は後円部を3段、前方部を2段の前方後円形に造成しています（図5）が、平野に面した南側については、墳丘の下にさらに基壇を設け、古墳をひと際大きく見せる工夫がなされています。沖出古墳の墳丘斜面は川原石を密に葺いて化粧されており、墳丘の頂上は、数多くの円筒埴輪、朝顔形埴輪、壺形埴輪が垣根のように立て並べられ、後円部中央や前方部先端の要

所には複数の家形埴輪が配置されていたようです。また、南側には北側に比べてやや大きめ埴輪を配列し、南側くびれ部の基壇上にも円筒埴輪と朝顔形埴輪を複数立て並べるなど、古墳の南側を立派に見せる仕掛けがなされていました。一方、北側の前方部には、「辟邪」を表すと思われる線刻画や他界観念を示す船の線刻画がある埴輪(図4)を配置するなど、南側とは異なる性格付けがなされていたようです。

埋葬施設は、後円部に竪穴式石室が1基だけ設けられていました。石室内の壁や床面にはベンガラ(赤色顔料)が塗られており、内部には舟形石棺が安置されていました(図3 写真③)。さらに、石棺の内部には、ベンガラではなくて朱(赤色顔料)が塗られていたことが判明しており、遺体の頭部が後円部のちょうど真ん中にあたるように意図的に石棺の配置が決められていたことも判明しました。

副葬品：埋葬施設は、残念ながら何度も盗掘を受けていたようで、副葬品の大半は残っておらず、発掘調査時には鉄刀1本が石棺の外に置かれていただけでした。しかし、石室内に流れ込んだ土砂の中から、玉、腕輪形石製品、鉄器の破片が出土しており、副葬品の一部をしることができます。現在、判明している副葬品は、下記のとおりです。

装身具：管玉6、ガラス玉1

腕輪形石製品：鍬形石3、車輪石2、石釧2

武器：鉄刀3以上、鉄剣1、鉄鏃2以上

農工具：刀子1、鉄斧1、鉋1

管玉については、6点のうち5点が大型品で共に石材は北陸産の緑色凝灰岩を用いています。いずれも光沢があり、比較的硬質の石材です。

腕輪形石製品は、一般には腕輪としての実用性はなく、古墳の葬送儀礼などに用いられた宝器と考えられています。沖出古墳では、鍬形石、車輪石、石釧の3種類が発見されており、それぞれに複数個体が存在しますが、同じ規格品とみられるものはありません(写真④)。また、それらの石材については北陸産の軟質緑色凝灰岩を使用していますが、材質が異なるものも含まれています。腕輪形石製品にみられる規格や材質の違いは、工人集団の差や製作時期の違いを示していると考えられ、本古墳に副葬された腕輪形石製品には系統が異なる新古のものが混在しているようです。

なお、調査事例が増加した今日においても、九州で鍬形石、車輪石、石釧の3種類がそろって出土する古墳は、依然、沖出古墳のみであることは、特筆されるでしょう。

3 古墳の年代と被葬者像

沖出古墳の副葬品については、盗掘を受けて全体像が分からないため、副葬品から古墳の年代を決めるには厳しい面がありますが、管玉・腕輪形石製品の特徴は前期的、また刃の長さが3cmを超えるような鉋の副葬は中期的な様相を示しています。沖出古墳から出土した埴輪については、鋤崎古墳(福岡県福岡市)や谷口古墳(佐賀県唐津市)などと共に北部九州の古墳に円筒埴輪が用いられ始めた頃の資料と考えられています。ただ、沖出古墳の埴輪の中には、上方に向かってまっすぐ開くプロポーシヨンの円筒埴輪が含まれるなど、中期初頭に位置付けられている鋤崎古墳などの埴輪よりもやや新しい様相が認められます。また、沖出古墳の墳丘上からは、葬送儀礼の祭祀に用いたと考えられる小型丸底土器、

二重口縁壺、高杯などの素焼きの土器が出土していますが、これらの土器の形態などからみた特徴も中期初頭の様相を示しており、埴輪から導かれる古墳の年代観と整合性は良いようです。沖出古墳は、北陸産石材の管玉・腕輪形石製品の副葬や二重口縁壺の供献のように古い要素を残しているものの、総合的に判断すれば、古墳時代中期初頭から前葉にかけて造られた古墳と評価されるのではないのでしょうか。実年代に置き換えると、沖出古墳に埋葬された人物は4世紀後半代を生き、4世紀末頃に古墳に葬られたのではないかと考えられます。

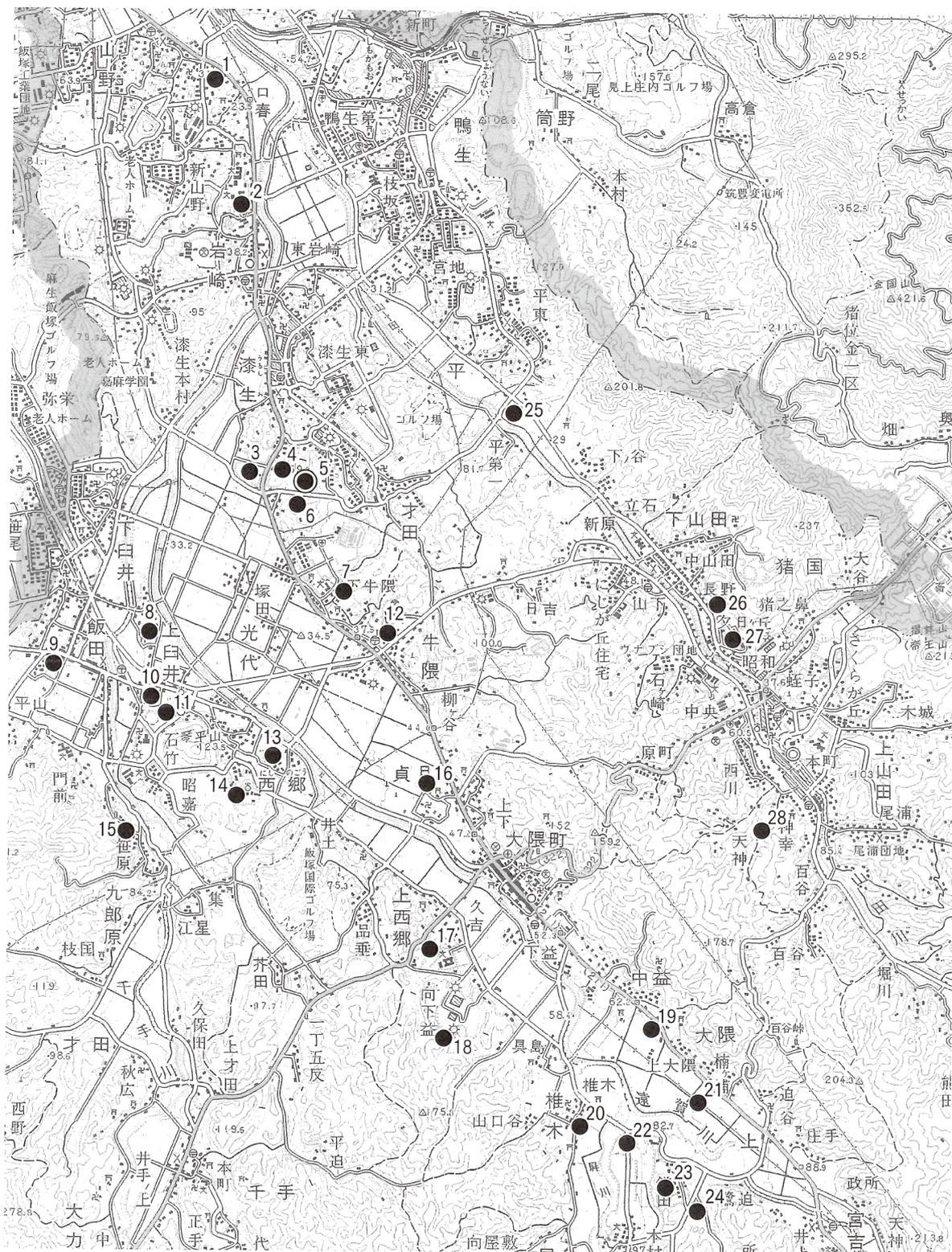
沖出古墳は、本古墳が位置する遠賀川上流域のみならず、北部九州の東側地域における古墳時代中期を画する古墳としても重要です。本古墳には祭器的な要素をもつ腕輪形石製品が副葬されていることから、埋葬された人物には司祭者のようなイメージがうかがえますが、玄界灘に浮かぶ沖ノ島祭祀遺跡からも鍬形石、車輪石、石釧の腕輪形石製品が出土している点に注目してみたいと思います。

遠賀川流域から現在、沖ノ島を抱える宗像地域にかけての東側地域は、弥生時代以来、墓制などの文化的親近性が高く、「奴国」、「伊都国」などが位置していた玄界灘沿岸の西側地域とはやや異なる文化圏を形成してきた地域で、この時期の北部九州における大型前方後円墳の分布をみると、西側地域では老司古墳（福岡県福岡市）、鋤崎古墳（福岡県福岡市）などが築造されているのに対し、東側地域では遠賀川下流域の古墳と並んで沖出古墳が主要な位置を占めていることが分かります。沖出古墳が造られた時期は、まさに沖ノ島祭祀がヤマト王権の主宰によって本格化する時期にあたりますが、壱岐・対馬を経由する大陸への航海ルートを利用する西側地域の首長層にとって、沖ノ島はさほど重視されることはなかったものと思われます。むしろ、沖ノ島は、東側地域の首長層の海上交通にとって重要な意味を持つ場所であり、沖出古墳に埋葬された人物についても、ヤマト王権が主宰する沖ノ島祭祀に参画していた可能性は高いのではないのでしょうか。内陸に位置する沖出古墳の埴輪に描かれた写実的な外洋船の絵(図4)もまた、沖ノ島との関係を示唆するものと言えるのかも知れません。

(文責：松浦宇哲)

主な参考文献

- 大賀克彦 2013「玉類」『古墳時代の考古学 4』副葬品の型式と編年、同成社
- 蒲原宏行 1991「腕輪形石製品」『古墳時代の研究 8』古墳Ⅱ副葬品、雄山閣
- 志賀智史 2008「前期古墳に用いられた赤色顔料の一樣相」『九州国立博物館紀要 東風西声』第4号
九州国立博物館
- 重藤輝行 2012「北部九州」『古墳時代の考古学 2』古墳出現と展開の地域相、同成社
- 竹中克繁 2006「古墳時代前期における九州の埴輪」『前期古墳の再検討』第9回九州前方後円墳研究会
大分大会、九州前方後円墳研究会
- 北條芳隆 2013「腕輪形石製品」『古墳時代の考古学 4』副葬品の型式と編年、同成社
- 松浦宇哲・福本寛 2017「筑豊の古式土師器」『九州島における古式土師器』第19回九州前方後円墳研究会長崎大会、九州前方後円墳研究会
- 松浦宇哲 2017『沖出古墳Ⅱ』嘉麻市文化財調査報告書第4集 嘉麻市教育委員会



- | | | | | | | |
|-----------|------------|------------|-----------|------------|------------|-----------|
| 1 かつて塚古墳 | 2 岩崎地下式横穴群 | 3 次郎太郎古墳群 | 4 漆生古墳群 | 5 沖出古墳 | 6 才木横穴群 | 7 堂の前遺跡 |
| 8 下白井日吉古墳 | 9 五穀神遺跡 | 10 上白井日吉古墳 | 11 御塚古墳 | 12 荒穂神社古墳群 | 13 竹生島古墳 | 14 西郷横穴群 |
| 15 笹原遺跡 | 16 貞月遺跡 | 17 久吉1号墳 | 18 西ヶサコ古墳 | 19 穴江・塚田遺跡 | 20 椎木・上椎遺跡 | 21 榎町遺跡 |
| 22 原田遺跡 | 23 鎌田原遺跡 | 24 尾畑古墳群 | 25 穴ヶ坂横穴群 | 26 長野古墳 | 27 長野横穴群 | 28 百々浦横穴群 |

図1 沖出古墳と周辺の遺跡(弥生時代～古墳時代)

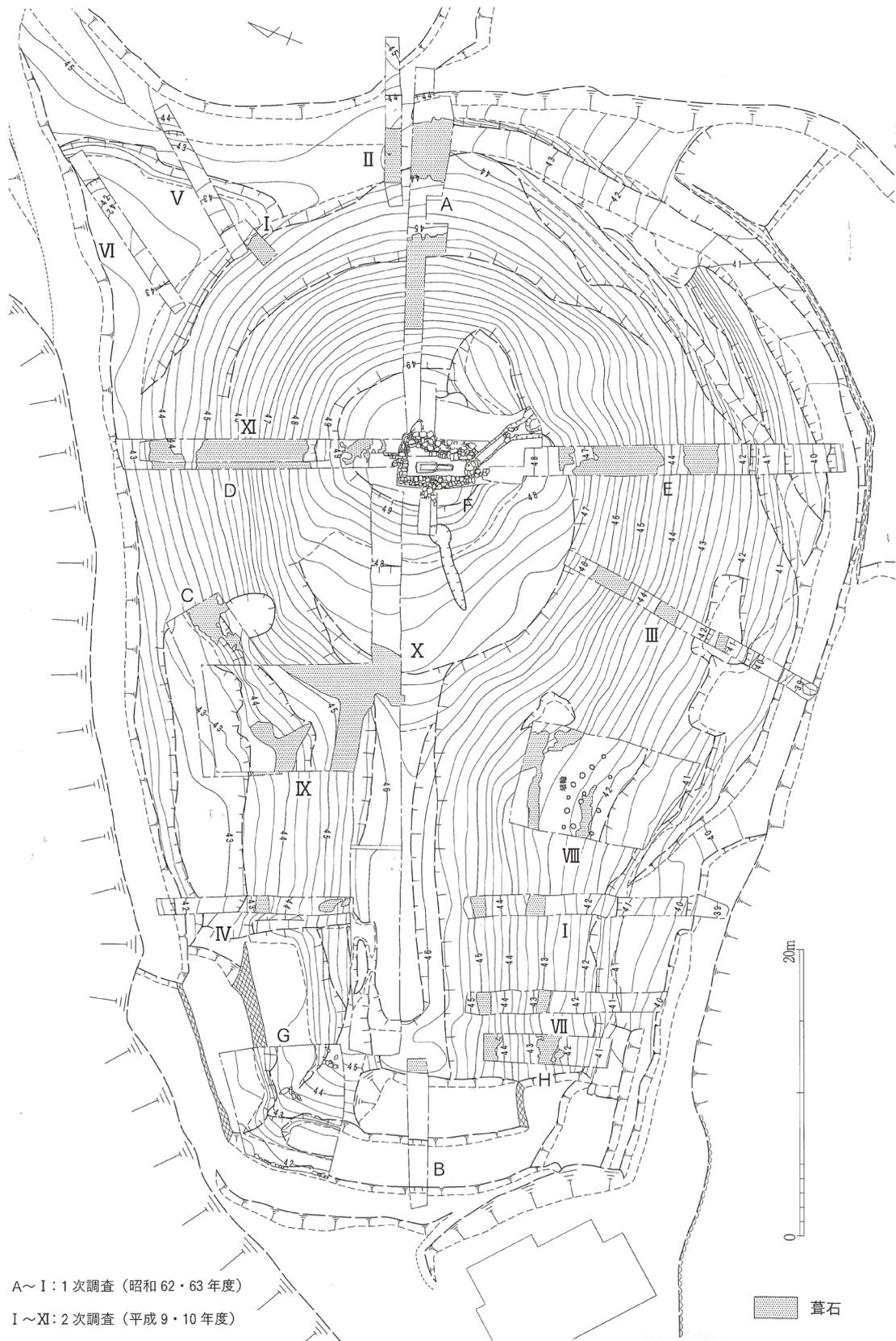


図2 沖出古墳の墳丘と調査状況図

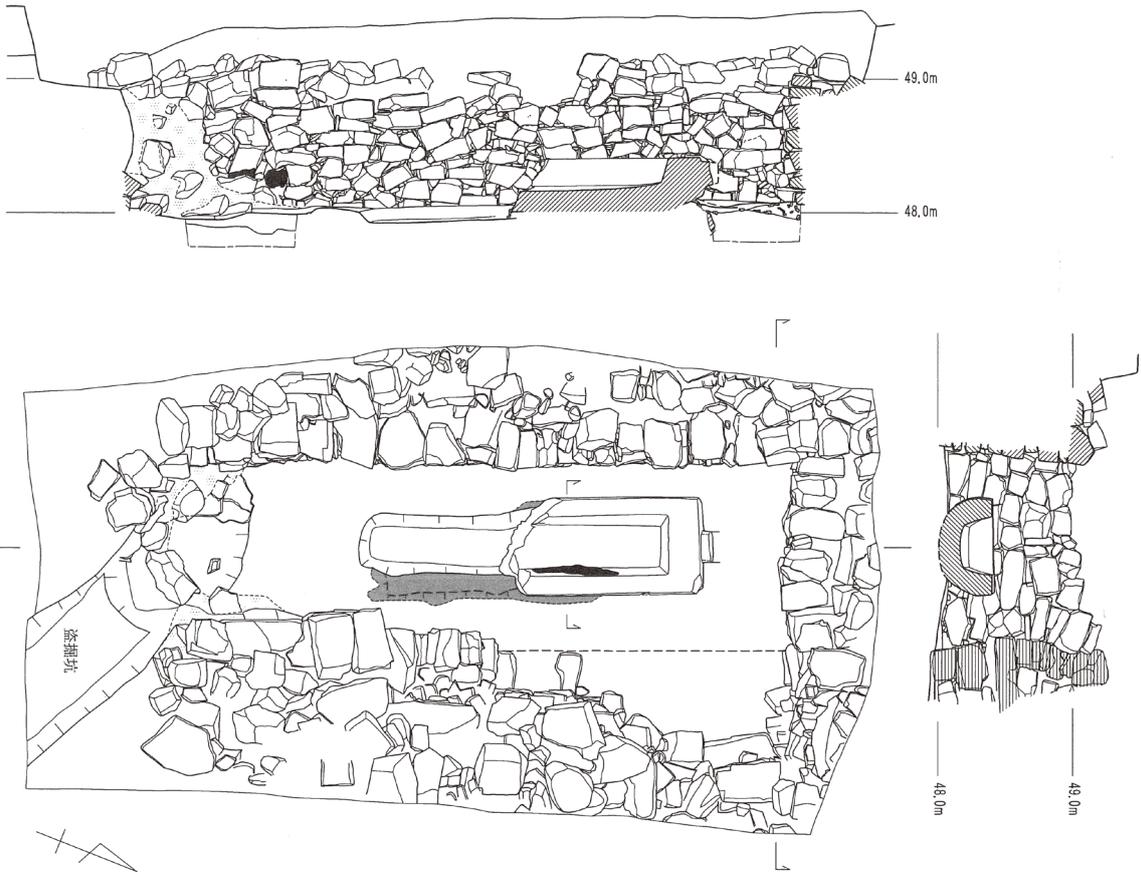


図3 沖出古墳の埋葬施設（竪穴式石室と石棺）

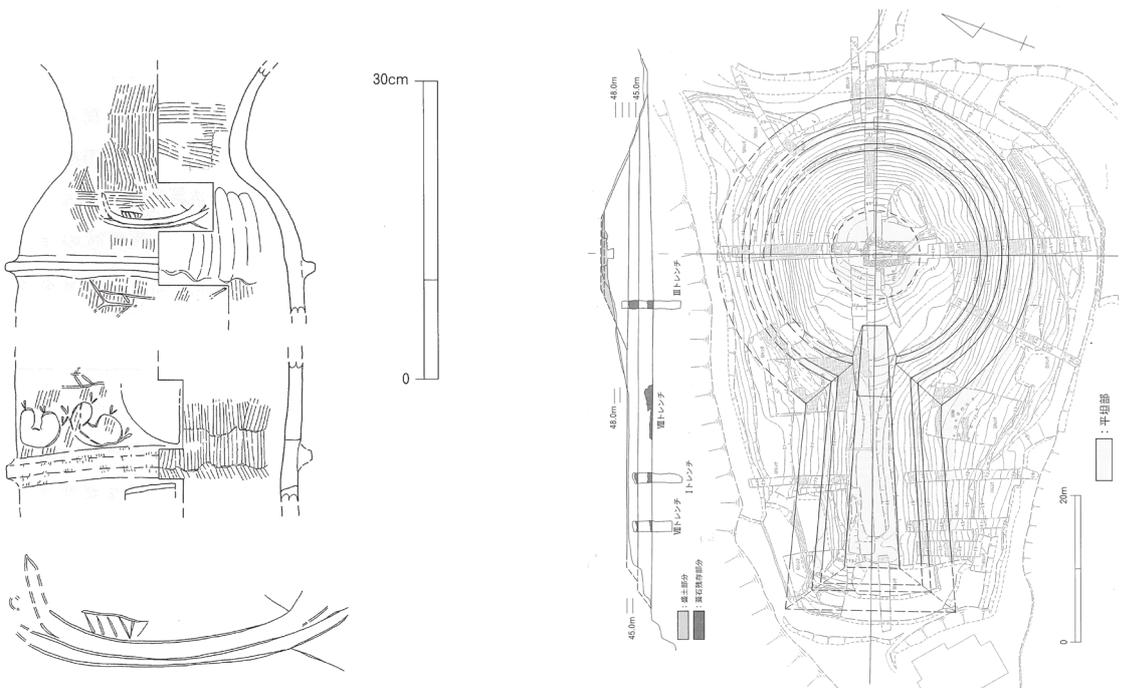
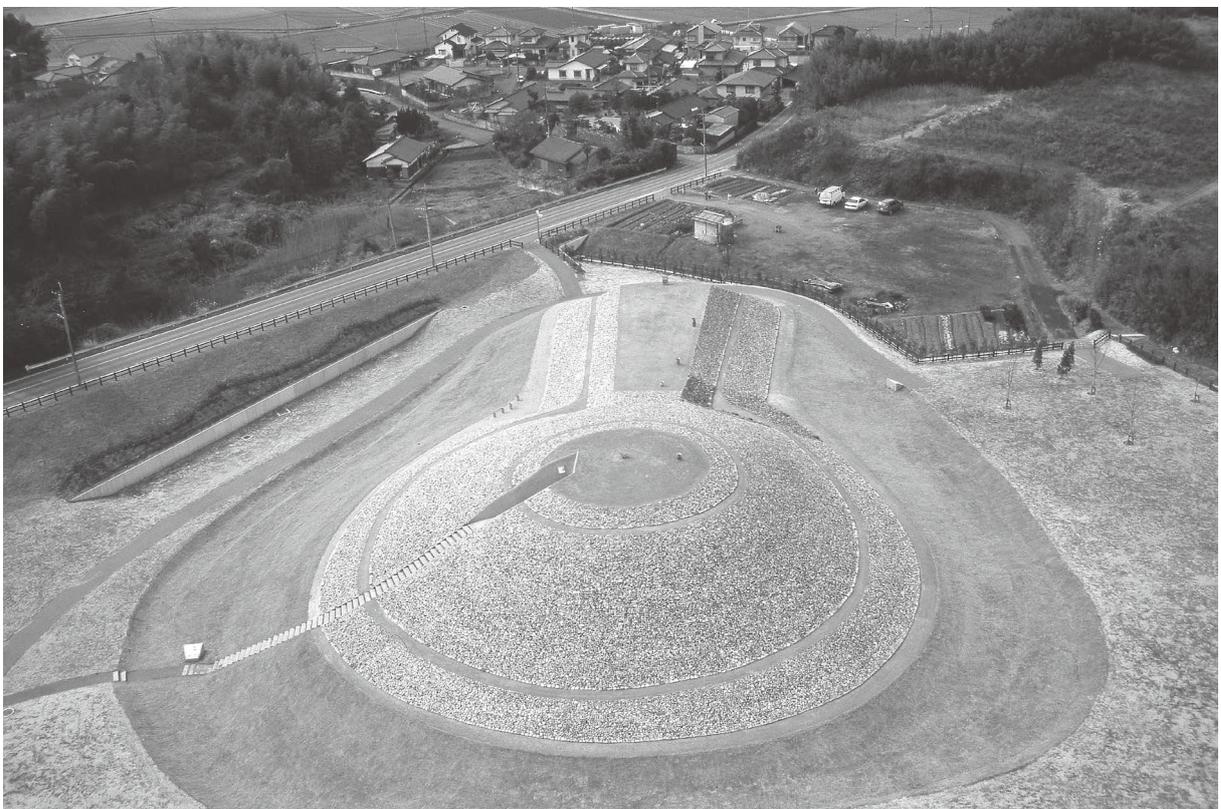


図4 「船」を描いた埴輪

図5 沖出古墳の復元図



① 復元整備された沖出古墳1（平成15年竣工時）



② 復元整備された沖出古墳2（平成15年竣工時）



③ 沖出古墳の竪穴式石室と石棺（第1次調査時）



④ 沖出古墳の腕輪形石製品

埴輪からみた沖出古墳

犬木 努(大阪大谷大学)

1 はじめに

沖出古墳の築造は古墳時代前期末葉～中期初頭とされ、本古墳が所在する嘉麻川流域では、墳丘上に円筒埴輪列を巡らせる古墳として初期の事例とされている。本古墳の埴輪には、壺形埴輪の配置という「在地的」要素と、定型的な円筒埴輪の樹立という「畿内の」要素が混在する様相が看取できるし、「畿内の」要素の受容に至る過渡的な様相を読み取ることも可能である。

本報告では、「柳井茶臼山古墳研究会」(代表:古谷 毅)による沖出古墳出土埴輪の再検討を踏まえて、上記のような観点から、その埴輪生産の具体相について考察する。

2 沖出古墳における埴輪の出土状況

沖出古墳の発掘調査は、1987・1988 年度に1次調査(稲築町教委 1989)、1997・98 年度に2次調査が行われている(嘉麻市教委 2017)。

1次調査では、後円部、前方部、北側くびれ部に設定されたトレンチで多量の円筒埴輪・壺形埴輪が出土したが、大半は墳丘上から転落したものとされている(図1～4)。家形埴輪の破片も出土しているが、大半は墳丘上段斜面からの出土で、本来は墳頂平坦面に配置されていたものと見なされている。2次調査でも、南側くびれ部や前方部側面などに設定されたトレンチの発掘調査を行っているが、原位置で検出された円筒埴輪・壺形埴輪はなく、1次調査と同様に多数の埴輪片が転落した状態で出土した(同前)。

2次にわたる発掘調査を通じて、埴輪片の検出状況などから、本来、墳丘中段平坦面に円筒埴輪・壺形埴輪は樹立されておらず、墳頂平坦面のみに樹立されていたと推測されている。

本古墳で確認されている埴輪の種類は、円筒埴輪(普通円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪)、壺形埴輪(二重口縁壺形埴輪、直口壺形埴輪)、家形埴輪である。家形埴輪以外の形象埴輪は現状では確認されていない。

3 沖出古墳出土埴輪の再検討―「柳井茶臼山古墳研究会」による調査研究―

嘉麻市教育委員会のご協力のもと、「柳井茶臼山古墳研究会」として、複数回にわたって、沖出古墳出土埴輪の再検討作業を行ってきた。その成果については、これまでに刊行されている研究成果報告書(後掲)に掲載されている(中村 2003、中村・井上 2008)。その後も、複数回にわたって補足調査を実施している。

沖出古墳出土埴輪の再検討に際しては、復元されている全ての個体のほか、細片についても全てを実見・検討し、調書の作成および写真撮影を行っている。

2003 年報告では、普通円筒埴輪・朝顔形円筒埴輪・家形埴輪の中で、「丁寧」に製作された一部の個体については、「少人数で構成される指導者的立場」の埴輪工人が製作した可能性が指摘され(中村 2003)、2008 年報告では、より詳細な検討に基づき、普通円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪、壺形埴輪の一部に、「器種や類型を横断してある種の情報が共有されていた」可能性が指摘された(中村・井上 2008)。

2008 年報告以降も、複数回にわたって補足調査が実施され、器種別に形態・製作技法上の分類を行うとともに

に、ハケメ調整が遺存する埴輪については、ハケメの等倍撮影を行っている。等倍写真の比較検討の結果、同一ハケメが器種を超えて確認され、後述するような器種間関係の解明に寄与することとなった。

4 沖出古墳出土埴輪の器種分類

既述の通り、沖出古墳では、円筒埴輪（普通円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪）、壺形埴輪（二重口縁壺形埴輪、直口縁壺形埴輪）、家形埴輪が確認されている。

このうち、普通円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪、二重口縁壺形埴輪の分類の概要は以下の通りである。

①普通円筒埴輪：主に口縁端部や突帯の形状等により、A類・Ba類・Bb類に分類する(図3)。

②朝顔形円筒埴輪：突帯形状、器壁の厚み、ハケメの大別等により、A類、B類、C類に大別する(図3・4)。C類については、頸部突帯の有無、突帯形状等により、Ca類・Cb類・Cc類に細別する(同前)。

③二重口縁壺形埴輪：頸部のくびれ具合等により、A類・B類に大別する(図4)。A類については底部の形状によりAa類・Ab類に細別する(同前)。なお、底部孔内面の調整手法にはかなりの多様性が認められ、当該器種の製作には存外に多くの人数が関わっている可能性がある。

家形埴輪については、基部から屋根まで全体形状がわかる個体がないため、部位ごとに破片の分類を行っている。その結果、①屋根に網代文様をもつ家形埴輪、②入母屋造りで直弧文をもつ家形埴輪、③無文の壁をもつ家形埴輪、④高床式の家形埴輪、などに大別され、一部はさらに個体識別が可能である(図5・6)。

5 沖出古墳の埴輪から読み取れること—生産体制についての予察—

本古墳出土埴輪を検討する上で、最大の課題は、普通円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪、壺形埴輪、家形埴輪のそれぞれにおいて設定された「類型」どうしの関係性を論じることであった。2003年報告や2008年報告では、口縁部や突帯の形状等を基準として器種間関係を論じ、一定の成果を挙げたが(中村 2003、中村・井上 2008)、細部の「端正さ」「丁寧さ」「粗雑さ」といった、やや感覚的な分類基準に若干の課題を残した。

その後の補足調査において、外面・内面にハケメ調整が看取される全ての個体・破片について、ハケメの等倍写真を撮影した。それに基づき、各器種の大別・細別分類と、ハケメ分類との対応関係を整理したのが表1である。表1では、普通円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪、壺形埴輪、家形埴輪の大別・細別「類型」のうち、「同一ハケメ」を有する「類型」間を「横線」でつなぎ、器種横断的な「ハケメ・パターン」の共有関係を示す。

「畿内的」な埴輪である普通円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪、家形埴輪と、「在地的」な埴輪である壺形埴輪に、「同一ハケメ」が看取できるということは、両者の製作工程において、同一母材から分割された「同一ハケメ」の工具が分有されていた可能性を示唆し、ハケメ工具、ひいては埴輪製作工程に関わる一定の管理体制が存在していたことを示唆する。これを換言すれば、「在地的」なカタチである壺形埴輪も、「畿内的」なカタチの円筒埴輪・家形埴輪と同一の生産体制の下で製作されていたことになる。「畿内的」な埴輪に加えて、「在地的」な埴輪が共存する場合、埴輪工人の臨時徴発的な側面や非熟練性が強調されることが多いが、本古墳の場合は、壺形埴輪の製作に際して、円筒埴輪製作工人側から一定の「技術管理」がなされていた可能性を示す。一古墳において、「畿内的」なカタチと「在地的」なカタチが、たまたま(共存)していたのではなく、意図的に(対置)されていたことを示唆するもので、埴輪配置の本義に迫る上でも非常に興味深い事例である。

6 おわりに

本稿では、沖出古墳における埴輪生産体制について一定の見通しを提示した。墳丘や周溝から出土する大量の埴輪片は、発掘調査および整理作業の終了後、往々にして「邪魔者」となり得るが、ここまで述べてきたように、どれほど小さな破片であっても、見る者の問題意識と分析手法如何では、実に雄弁な「証言者」となり得る。現時点で、沖出古墳の埴輪から抽出し得た情報はなお限定的であり、今後の更なる検討が必要である。

付記

本稿は、柳井茶白山古墳研究会による度重なる資料調査および検討結果に依拠している。資料調査時の研究会において、円筒・壺形埴輪について報告された井上義也氏(春日市教育委員会)、家形・壺形埴輪について報告された古谷 毅氏(京都国立博物館)、そして資料調査時に種々ご高配頂いた松浦宇哲氏(嘉麻市教育委員会)に心より感謝申し上げる。

参考文献(刊行順)

稲築町教育委員会 1989『沖出古墳』稲築町文化財調査報告書第2集

中村利至久 2003「福岡県・沖出古墳」『埴輪工人の移動からみた古墳時代前半期における技術交流の政治史的研究』2000～2002 年度科学研究費補助金基盤研究 C(2)研究成果報告書、東京国立博物館

中村利至久・井上義也 2008「沖出古墳」『日本古代手工業史における埴輪生産構造の変遷と技術移転から見た古墳時代政治史の研究』2005～2007 年度科学研究費補助金基盤研究 B(2)研究成果報告書、東京国立博物館

嘉麻市教育委員会 2017『沖出古墳Ⅱ』嘉麻市文化財調査報告書第4集

「柳井茶白山古墳研究会」の研究成果報告書

①古谷毅編 2003『埴輪工人の移動からみた古墳時代前半期における技術交流の政治史的研究』2000～2002 年度科学研究費補助金基盤研究 C(2)研究成果報告書、東京国立博物館

②古谷毅編 2008『日本古代手工業史における埴輪生産構造の変遷と技術移転から見た古墳時代政治史の研究』2005～2007 年度科学研究費補助金基盤研究 B(2)研究成果報告書、東京国立博物館

③古谷毅編 2015『家形埴輪の群構成と階層性からみた東アジアにおける古墳葬送儀礼に関する基礎的研究』

挿図出典

図1・2・7: 嘉麻市教委 2017 掲載図面を一部改変。図3・4: 稲築町教委 1989・嘉麻市教委 2017 掲載図面を用いて作成。

図5・6: 稲築町教委 1989 掲載図面を用いて作成。表1: 柳井茶白山古墳研究会の研究成果に基づき犬木作成。

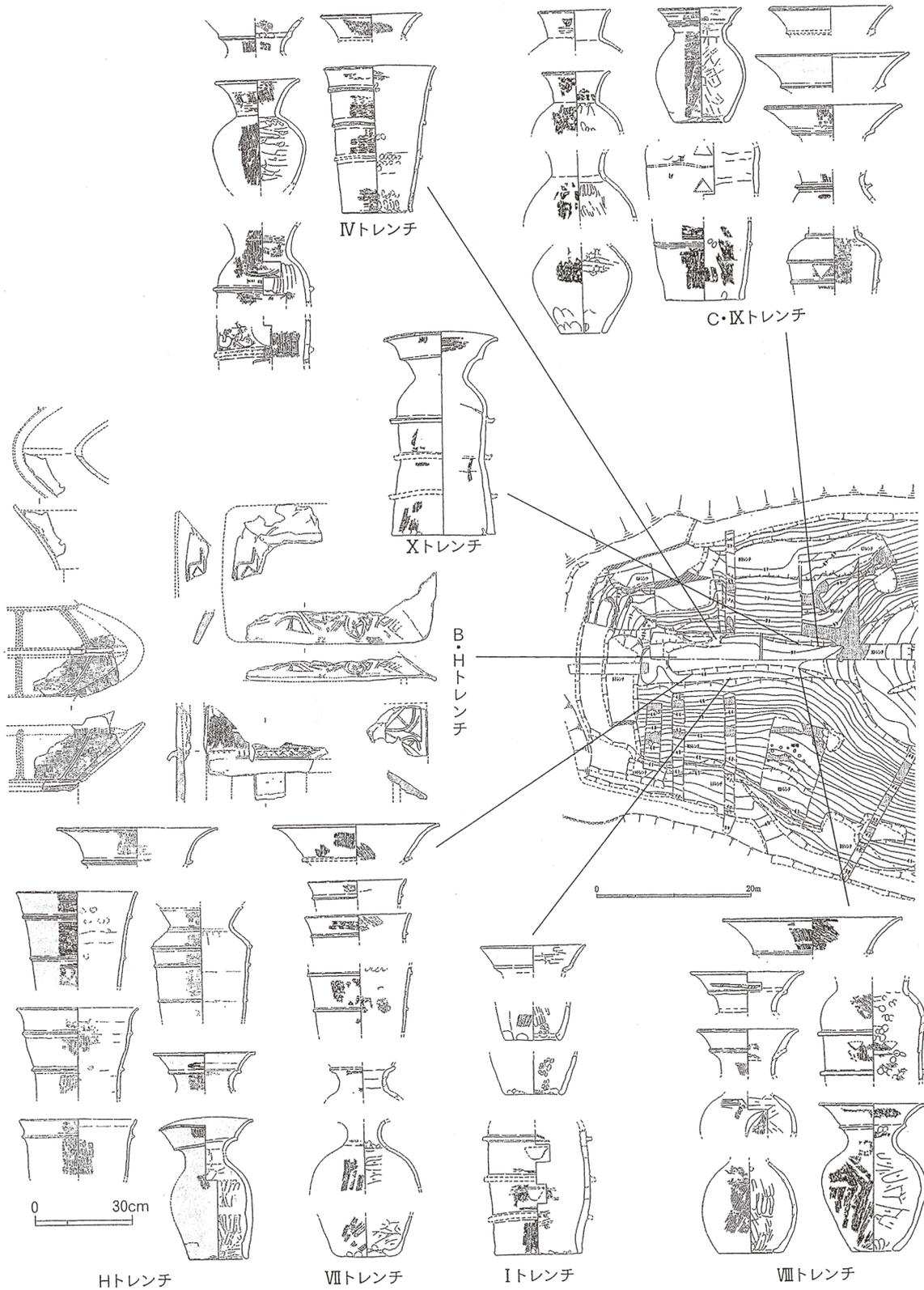


図1 沖出古墳における埴輪配置(推定)(1)[前方部側]

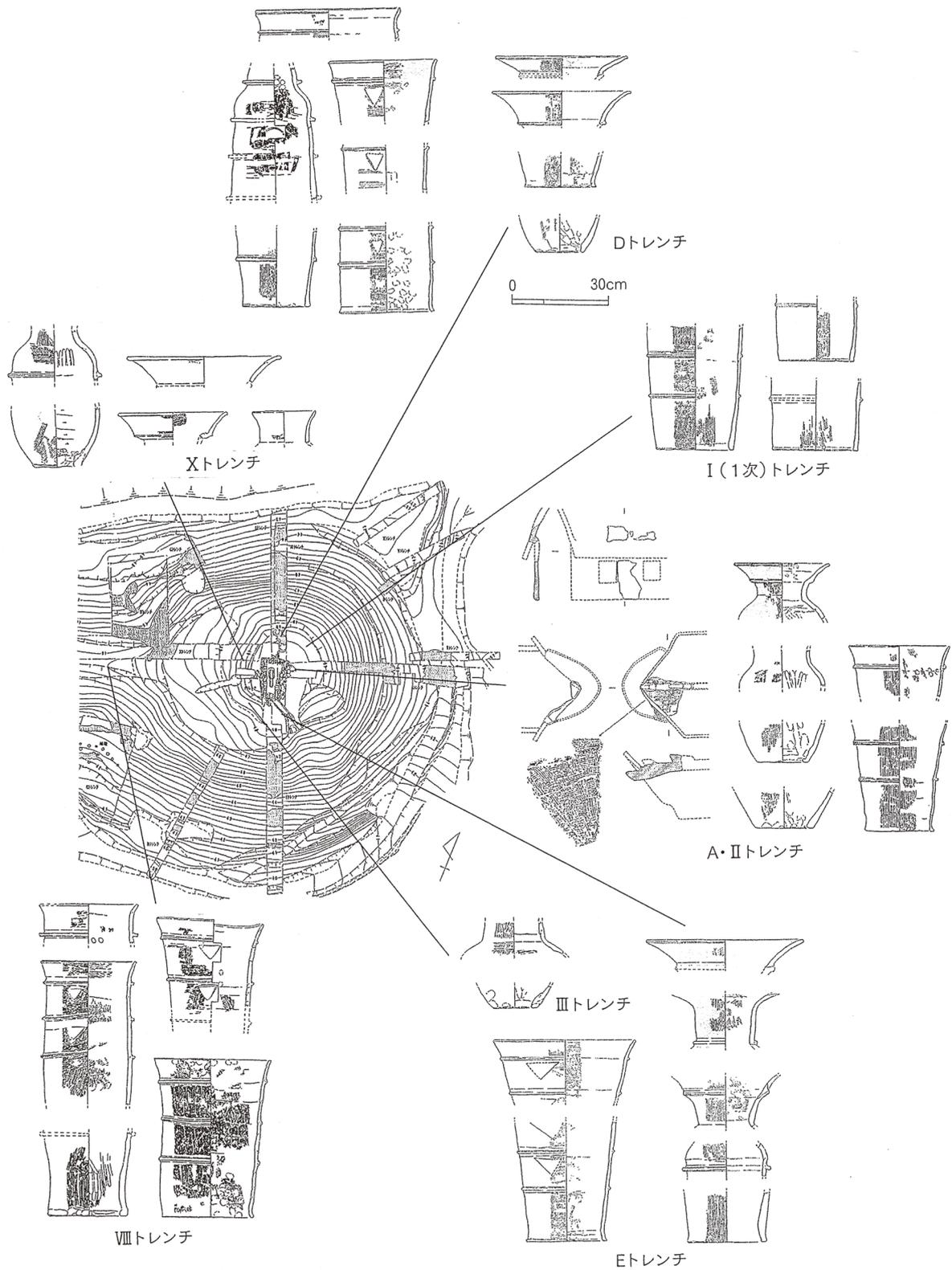
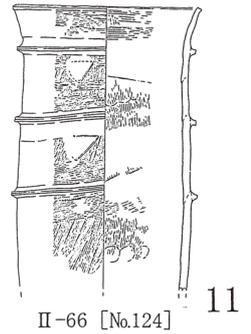
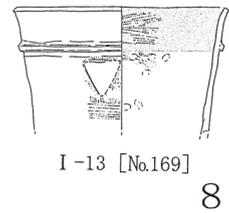
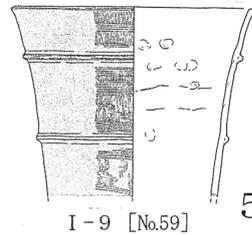
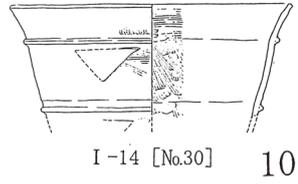
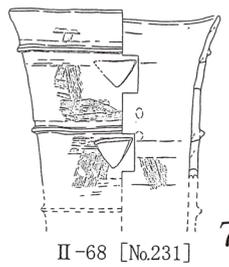
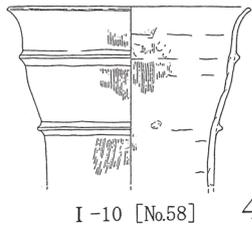
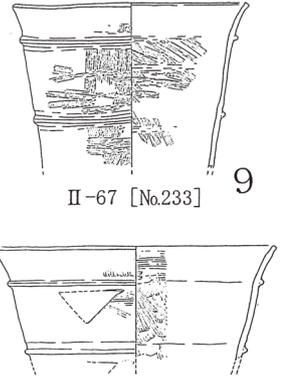
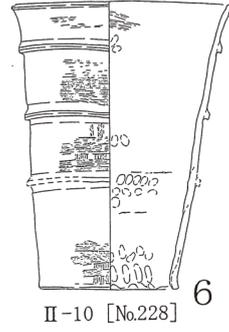
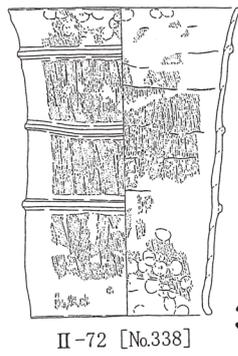
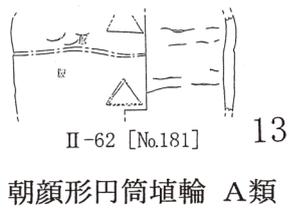
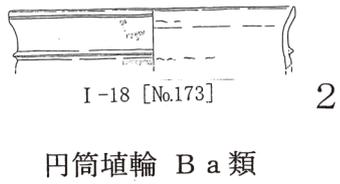
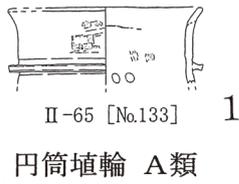
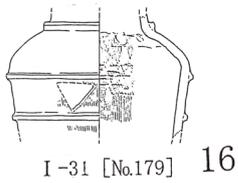
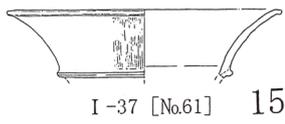
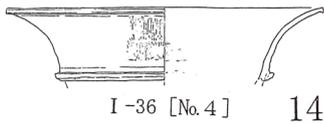
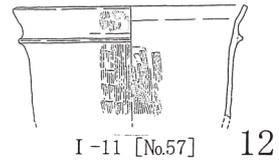


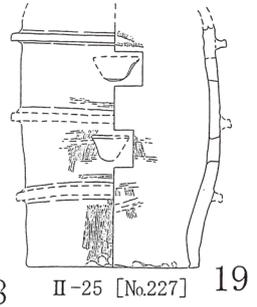
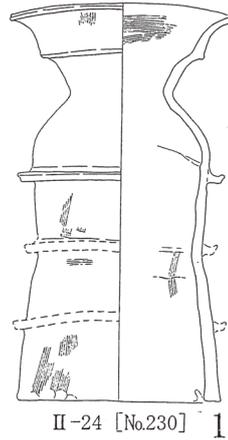
図2 沖出古墳における埴輪配置(推定)(2)[後円部側]



円筒埴輪 B b類

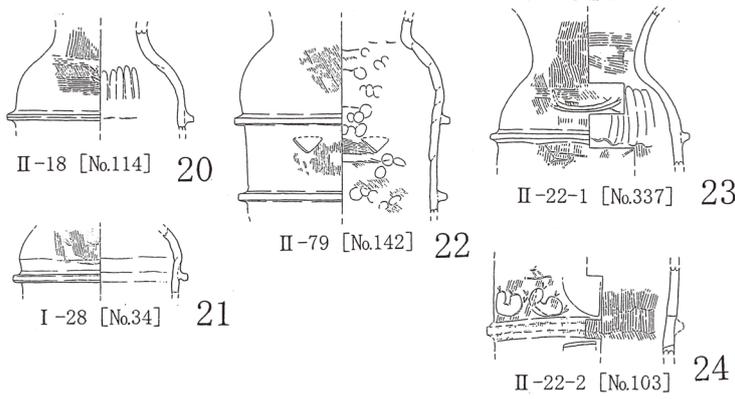


朝顔形円筒埴輪 B類

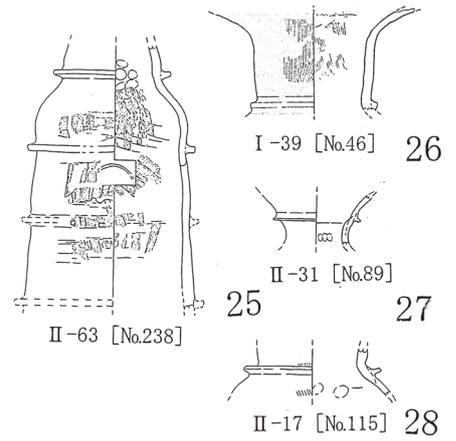


朝顔形円筒埴輪 C a類

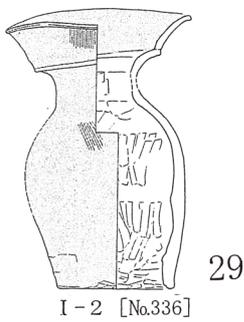
図3 沖出古墳出土円筒埴輪・壺形埴輪の分類(1) (S=1/12)



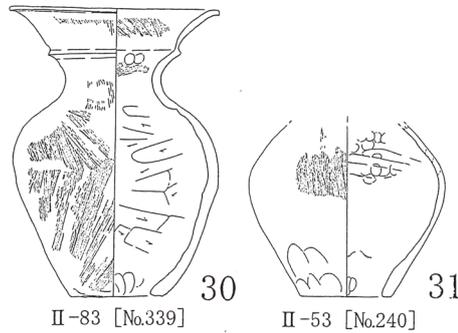
朝顔形円筒埴輪 C b類



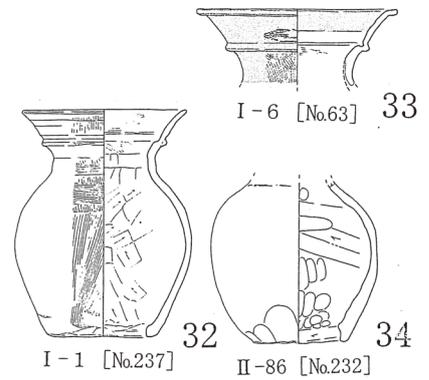
朝顔形円筒埴輪 C c類



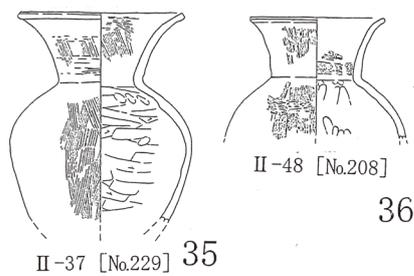
二重口縁壺形埴輪
A a類



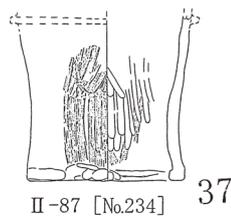
二重口縁壺形埴輪 A b類



二重口縁壺形埴輪 B類



直口壺形埴輪



器種不明埴輪

【凡例】

・図面の出典は、すべて、『沖出古墳』(1989年)および『沖出古墳Ⅱ』(2017年)である。各埴輪には、「□-○ [No.△]」という番号を付す。□にはIないしIIと記す。Iは1989年刊行の報告書掲載図面、IIは2017年刊行の報告書掲載図面であることを示す。○には両報告書における挿図番号(通し番号)、△には各埴輪の「整理番号」を記す。

図4 沖出古墳出土円筒埴輪・壺形埴輪の分類(2)〈S=1/12〉

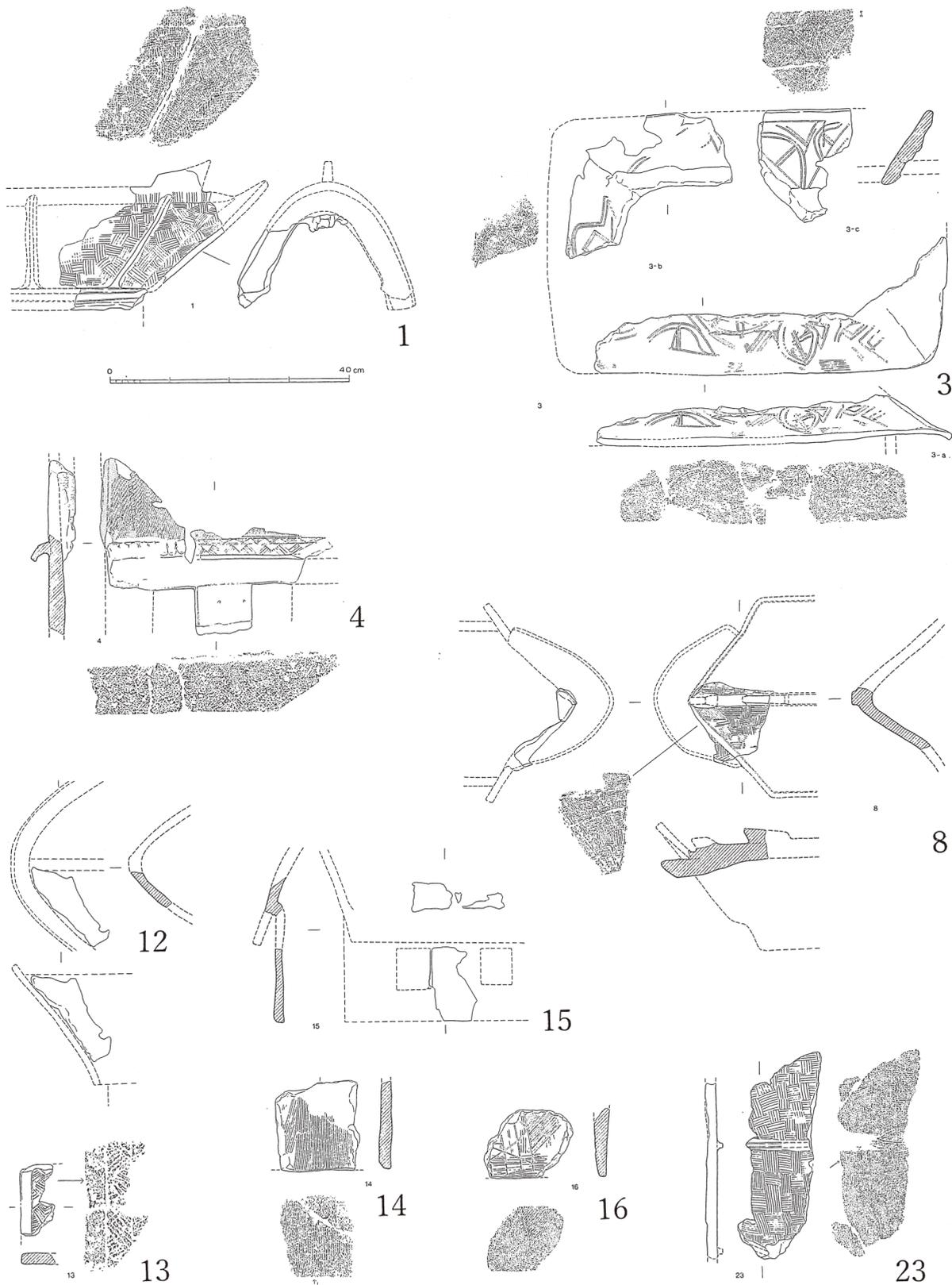


図5 沖出古墳出土の家形埴輪(1)〈S=1/12〉[『沖出古墳』より]

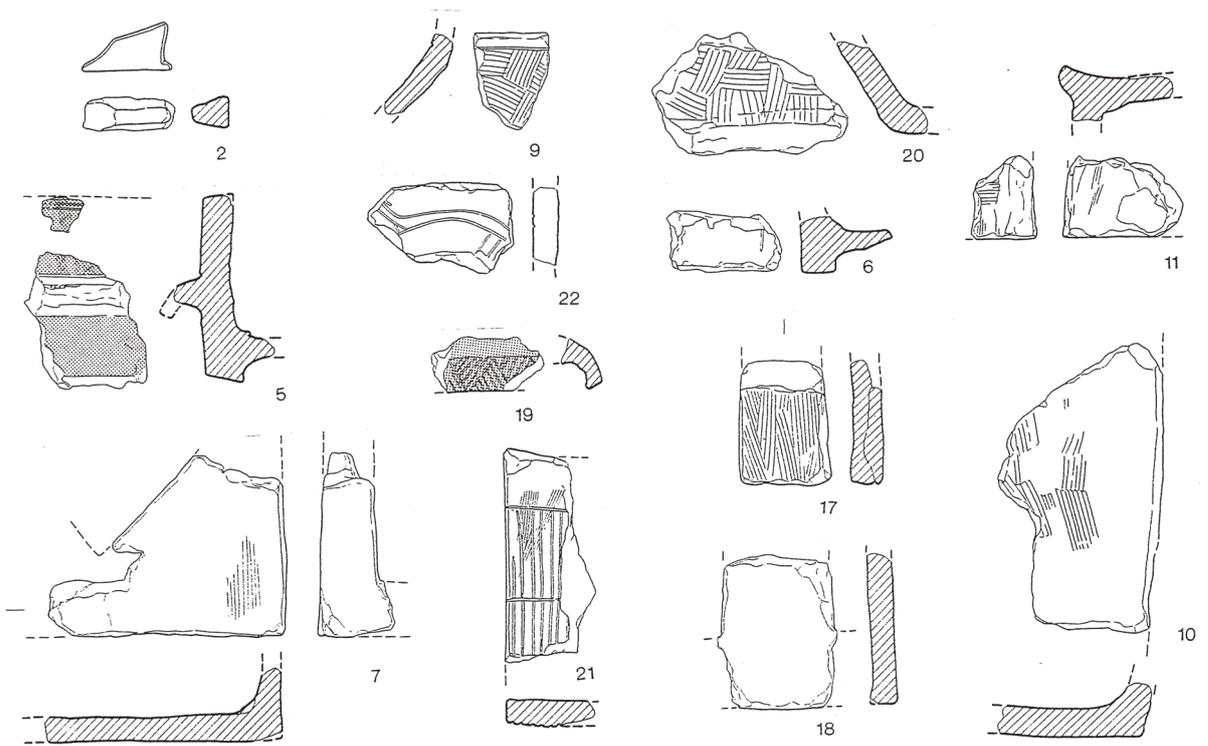


図6 沖出古墳出土の家形埴輪(2)〈S=1/5〉[『沖出古墳』より]

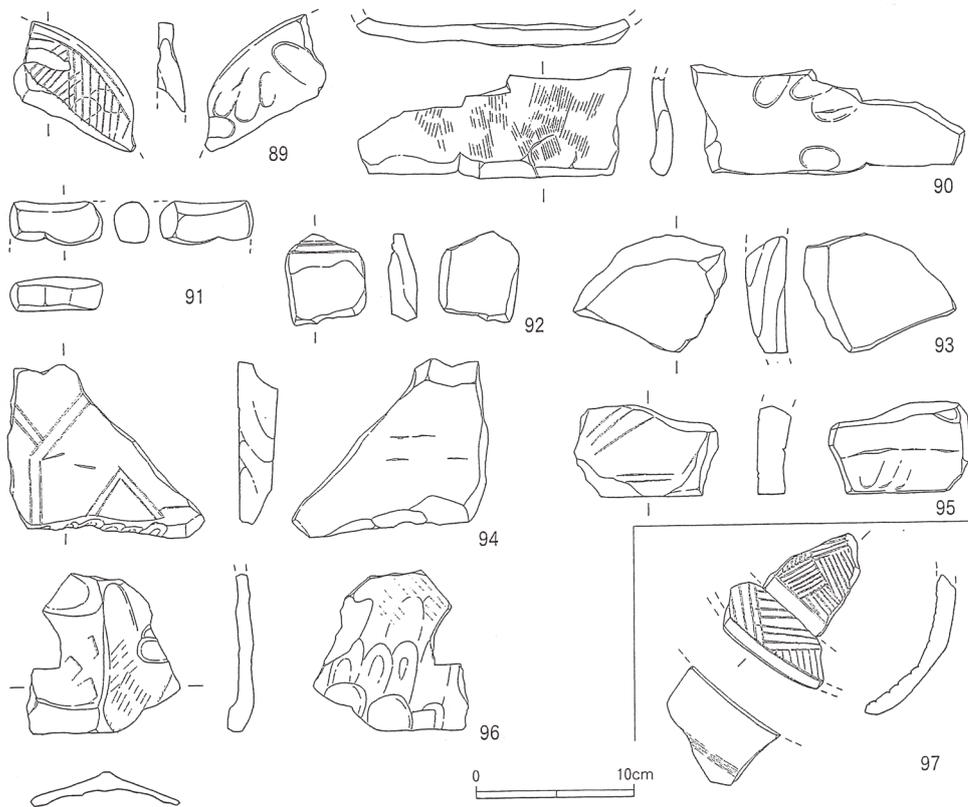


図7 沖出古墳出土の家形埴輪(2)〈S=1/5〉[『沖出古墳II』より]

石製品からみた沖出古墳

清喜 裕二 (宮内庁書陵部)

1 石製品とは

本稿では石製品からみた沖出古墳とその被葬者像について考えてみる。ところで、「石製品」と聞いたら誰もが「石で作られた何らかの製品、器物」を示していると思うだろう。考古学では総称としてこの意味で使うことがある一方で、ある特定の意味を与えて使う場合がある。ここで取り扱う「石製品」は後者にあたり、主に古墳時代の前半期に碧玉や緑色凝灰岩を使用して、様々な器物を模造した遺物のことを指している。ただ、表記が漠然とした一般的な名称なので、「何らか」の中身を示すために種類ごとに「〇〇形石製品」と呼んで具体的な中身を示す。

沖出古墳からは、主に弥生時代から使用されてきた貝製腕輪を基に製作された「腕輪形石製品」が出土している。これは「鋏形石」、「車輪石」、「石釧」の3種から構成されており、それぞれゴホウラ、カサガイ、オオツタノハ、イモガイといった奄美諸島以南で採取される大型の貝を利用して製作された腕輪が基になったと考えられている。「腕輪形石製品」は他種の「石製品」と比較して圧倒的な数量が出土しており、分布範囲も広い(図1)。三角縁神獣鏡とともに古墳時代前期の政治的動向を示す有効な資料であることが示されて以来(小林 1956・1957)、古墳時代研究の重要な遺物のひとつと位置付けられている⁽¹⁾。このような背景により、沖出古墳出土の石製品(腕輪形石製品)を他の古墳・遺跡から出土した資料と比較することで、被葬者像を考える手がかりを得ることができるのである。

2 沖出古墳出土の石製品(腕輪形石製品)

先に述べたように、腕輪形石製品には3種類があるが、沖出古墳の場合はそのすべてが出土していることが大きな特徴といえる。(図3)。また、各種類ともに複数個体が出土しており(鋏形石3、車輪石2、石釧2)、盗掘を受けていることから考えると、さらに多くの点数を副葬していた可能性を想定することも可能であろう。中でも分布域がもっとも狭く出土数の少ない鋏形石が3点出土している点は注目される点である。

石製品は、主に形態と表面に施される装飾、使われている石材の特徴などから分類をして、製作時期や製作者集団の違いなどを推測していく。報告書に既に概要が示されているが、これまでの腕輪形石製品の研究を参照すると(岡寺 1999、蒲原 1991、北條 1994・2013 など)、形態や石材が分けられることから製作時期や製作者集団の異なった個体で構成されていると考えられる(松浦 2017)。結果的に、沖出古墳の被葬者のもとにこれらの資料がもたらされたのであるが、すべてが一括でもたらされたのか、製作された順番で幾つかの機会を経てもたらされたのか、あるいは種類によって異なるのかを判断することは難しい⁽²⁾。

次に、個別の特徴をみていこう。まず、鋏形石と車輪石は製作時期が新しいと次第に大型化してくる傾向が指摘されている(河村 1989、三浦 2005)。沖出古墳出土資料中では、図3のK3、S2が該当す

る。小型のK 1・2やS 1が貝輪の形や大きさにより近く貝輪の特徴ととどめていることから、大型品よりも古い時期に製作されたと位置付けられている。このように、いくつか古い特徴をもつ資料と新しい特徴をもつ資料が混在している（松浦 2017）。この中で、鍬形石K 3に注目してみよう。この資料は大型化して貝輪の特徴もかなり失われているため、鍬形石の中でも新しい時期に製作されたと考えられている。また石材も、縞状の模様が見えるような特徴的な石材が使用されている。このような鍬形石は、古墳出土資料の中にも多く認められるほか、古墳以外の場所でなんらかの祭祀に使用されたような状況で出土する事例が知られている（奈良県平等坊岩室遺跡、滋賀県中沢遺跡など）。また、島の山古墳前方部粘土槨が著名であるが、古墳の中でも祭祀に使用されたような出土状況が知られることから、祭器としての性格ももった資料であることが推測される。

このように、異なる形態や石材で製作された個体が混在して沖出古墳の腕輪形石製品のセットを構成しており、そのうち祭器として用いられているものと同様の特徴をもつ個体も含まれているといえる。

3 沖出古墳の腕輪形石製品をめぐって

次に、九州や近畿出土の資料との関係性を幾つか特徴的な資料に注目して考えてみたい。

九州においては、種類として腕輪形石製品3種をすべて出土した遺跡は、沖出古墳と沖ノ島に限られる。さらに、数として沖出古墳以外に複数個体の出土が知られるのは、沖ノ島を除くと、古墳では大分県免ヶ平古墳、猫塚古墳と佐賀県谷口古墳である。猫塚古墳の鍬形石は現存しないが絵図から沖出古墳のK 3に類似する大型の資料であることがわかる。その特徴からみる限り、九州にもたらされた鍬形石は製作時期が比較的新しいものの多いことが指摘される（小田 1986）。免ヶ平古墳・谷口古墳はいずれも石釧のみの副葬である。形態・石材の特徴などから、免ヶ平古墳が沖出古墳や谷口古墳より古い特徴の個体で占められており、古墳の年代としても古いと考えられている。

九州の中では、種類・数の面からみると、古墳よりも祭祀遺跡である沖ノ島の状況に近いことが読み取れる。また、古墳、特に大型の首長墓としては谷口古墳が比較的近い様相をもっているといえそうである（図4）。

次に、近畿地方の資料をみてみよう。近畿地方は腕輪形石製品3種を副葬する古墳などが知られるほか、種類だけではなく多量副葬する古墳も少なからず存在することが特徴として挙げられる。その中から、ここでは大阪府国分茶臼塚古墳と大師山古墳出土例と比較してみたい（図5）。両古墳とも中小規模の古墳といえるが、数十点規模でまとまった点数の腕輪形石製品3種が出土している。そして、両古墳に限ったことではないが、多量副葬の場合でも、鍬形石が車輪石や石釧と比較して数が少ない傾向に変わりはない。

鍬形石からみていくと、沖出出土例のうちK 1・2と国分茶臼塚1、大師山1が大きさ、形態とも類似したものであることが見て取れる。また同様に、沖出K 3と国分茶臼塚3が対応する特徴をもった資料といえそうである。大きさ、形態の類似だけではなく、石材も縞状の模様がみられる石材で共通している点は注意しておきたい（石井 2019）。車輪石も、沖出S 2と国分茶臼塚5と大師山3が大型品として共通した特徴をもっていると考えられる。大師山古墳ではさらに大きな個体も知られている（大師山

4)。石釧は、大きさの違いが前2者と比較してそれほど顕著ではないため、大きさで特定の個体どうしの類似を指摘するのは難しい。また、斜面や側面の刻みや形態の組み合わせでバリエーションがあるため、出土点数が多い割には全体として類似を指摘できる個体の数は少ない傾向がある。沖出I 1であれば、国分茶臼塚6、I 2であれば大師山5との類似が指摘できようか。

ところで、石釧に関しては、免ヶ平古墳出土の石釧（図4-8）と国分茶臼塚古墳の石釧（図5-茶臼塚7）の類似が指摘されている（小田1986）。ここでは、腕輪形石製品の諸特徴に注目して比較を行っているが、沖出古墳に先行して築造されたと考えられる免ヶ平古墳と国分茶臼塚古墳出土資料に類似品が存在することで、沖出古墳と国分茶臼塚古墳の築造年代と石製品のもつ年代幅の関係など、石製品を単純に比較するだけでは解決できない問題が含まれていることにも注意が必要である。

なお、国分茶臼塚出土例については、石材や製作技術のまとめりからその構成を検討した研究があるが（石井2019）、沖出古墳出土例も点数が少ないものの構成としては単一ではなく、近畿の多量副葬例に対照しうる構成をもつと考えることができよう。

このように比較してみると、沖出古墳と近畿の事例の間には、個体によっては個別に形態や石材の類似する資料が存在しており、構成にも共通点が多いといえる。つまり、沖出古墳の石製品は近畿地方を中心にみられる多量副葬の縮小版ともいえる状況を示しているといえよう。

4 石製品からみた沖出古墳

最後に腕輪形石製品以外の要素とも絡めながら、沖出古墳とその被葬者について考えてみたい。

ここでは、主に佐賀県の谷口古墳と比較してみよう（亀井1982）。石製品において顕著な複数個体の副葬が知られる点で、九州の中では沖出古墳と共通した特徴をもつといえる（表1）。また、石釧の石材は縞状の模様がみえる石材であり、沖出古墳K3の石材と同様のものと考えられる。

墳形はともに前方後円墳で、墳丘長は谷口古墳が少し長いが両者に大きな差はみられない。しかし、埋葬施設と副葬品に違いがみられる。前方後円墳においては主たる埋葬施設が後円部に営まれるが、沖出古墳は竪穴式石室に舟形石棺を用いている。一方、谷口古墳は後円部と前方部に計3箇所の埋葬施設をもち、後円部には2基の横穴式石室が築かれている（図6）。沖出古墳とは石室の種類が違うほか、石棺も長持形石棺という近畿の大型古墳に多くみられる棺と同じ形式のものが使われている。舟形石棺よりも上位階層の棺と考えられるものであるが、谷口古墳前方部の従たる埋葬施設で舟形石棺が使われていることから、一定の格差が存在していたとみられる。沖出古墳における「主たる」石棺と谷口古墳における「従たる」石棺が同じ階層ということになるが、この両者については同じ特徴をもつという指摘がある（新原1991、高木1994）。そうだとすれば、沖出古墳の被葬者と谷口古墳の後円部被葬者の関係にも階層差が想定されると同時に両者の親縁性も高いことが推測される⁽³⁾。

ところで、埋葬施設で比較すると谷口古墳の被葬者が上位階層ということになるが、腕輪形石製品では、沖出古墳が3種を複数副葬しているのに対して、谷口古墳は複数副葬ではあるが石釧のみである。石製品での優位性は沖出古墳の側にあるようにみえるが、この状況はどのように考えられるだろうか。

先述のとおり、沖出古墳に腕輪形石製品3種が副葬された背景として、沖ノ島祭祀との関係が指摘さ

れていることについて取り上げたが（松浦 2017）、石棺が被葬者の政治的側面での階層を示すとした場合、腕輪形石製品はその側面に加えて、王権が深く関わる重要な祭祀（この場合沖ノ島祭祀）などへの関与の度合いに応じて所有し得うる性格ももっていたと考えてみたい。これは、職掌というほど厳密なものとはいえないが、先述した腕輪形石製品の祭器としての側面と関わって、その関与を背景としているといえよう。

同様のことは、鏡からの検討で朝鮮半島との交流が活発化してくる段階（沖出古墳築造前後の時期）での九州における動向として、横穴式石室の導入と沖ノ島祭祀が指摘されている（辻田 2019）。沖出古墳では、盗掘のため鏡の有無は不明であるが、石製品や埋葬施設からみた沖出古墳と谷口古墳の関係もこのような背景をもとに理解できるのではないだろうか。

加えて、沖出古墳の埴輪には船や衝立状の線刻画が描かれたものがある。特に船は他界観念を表した可能性があるが（松浦 2017、和田 2014）、王権中枢に関わる人物が被葬者と考えられる奈良県巢山古墳からは、実物としての木製の船や棺が出土しており、喪葬の様子が想起される（図7）。ここからは出土地として確定できないものの、沖出古墳の腕輪形石製品と同様の特徴をもつものが知られている（図8）。

石製品からみた沖出古墳の被葬者像は、王権中枢から沖ノ島祭祀を行うにあたって重要な位置づけを与えられた人物の一人であった可能性を考えておきたい。その中で、腕輪形石製品3種を所有し、葬制に関する情報も得ていたのであろう。九州の中では谷口古墳の被葬者との関係が考えられるが、朝鮮半島との交流にあたっては、谷口古墳の被葬者とは異なり沖ノ島祭祀への関与という、違った立ち位置にあったと考えられる。

表 1

	墳形	墳丘長	後円部埋葬施設	前方部埋葬施設	石製品	鏡
沖出古墳	前方後円墳	69.5m	竪穴式石室 舟形石棺	なし	鉄3車2釧2	不明
谷口古墳	前方後円墳	約77m	横穴式石室 長持形石棺(東・西)	舟形石棺 直葬	釧11(東)	三縁2(東)・2(西)

〔凡例〕 鉄：鉄形石 車：車輪石 釧：石釧 三縁：三角縁神獣鏡 (東)：後円部東石室 (西)：後円部西石室

※谷口古墳の後円部には東西に横穴式石室が2つある。東石室からは三角縁神獣鏡のほか、位至三公鏡1面、変形四獣鏡2面が出土している。

註

(1) 使用方法としては、貝製腕輪は実際に装着されていたものだが、腕輪形石製品にはいくつかの使用方法が考えられる。古墳出土例が圧倒的に多いが、実際に被葬者が装着していたことを示すような出土例は少なく、装飾品というより主に宝器・祭器としての性格が想定されている。九州では、大分県免ヶ平古墳や熊本県向野田古墳で装着を推定させるような出土状況が知られる(図2)。また、古墳以外での出土例では祭器としての性格を考えるべき出土状況も全国的に確認されてきている。

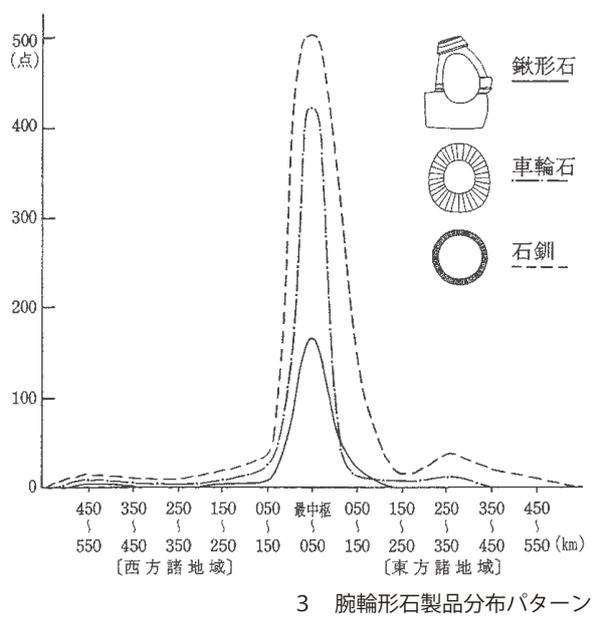
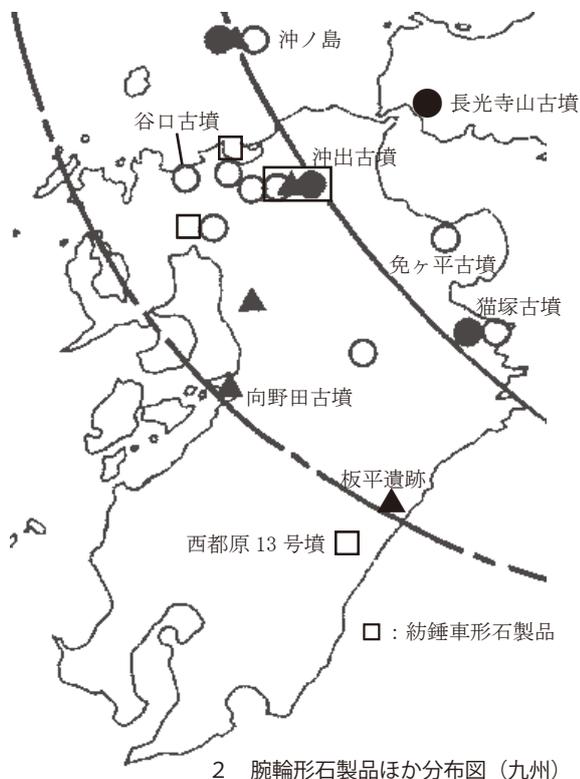
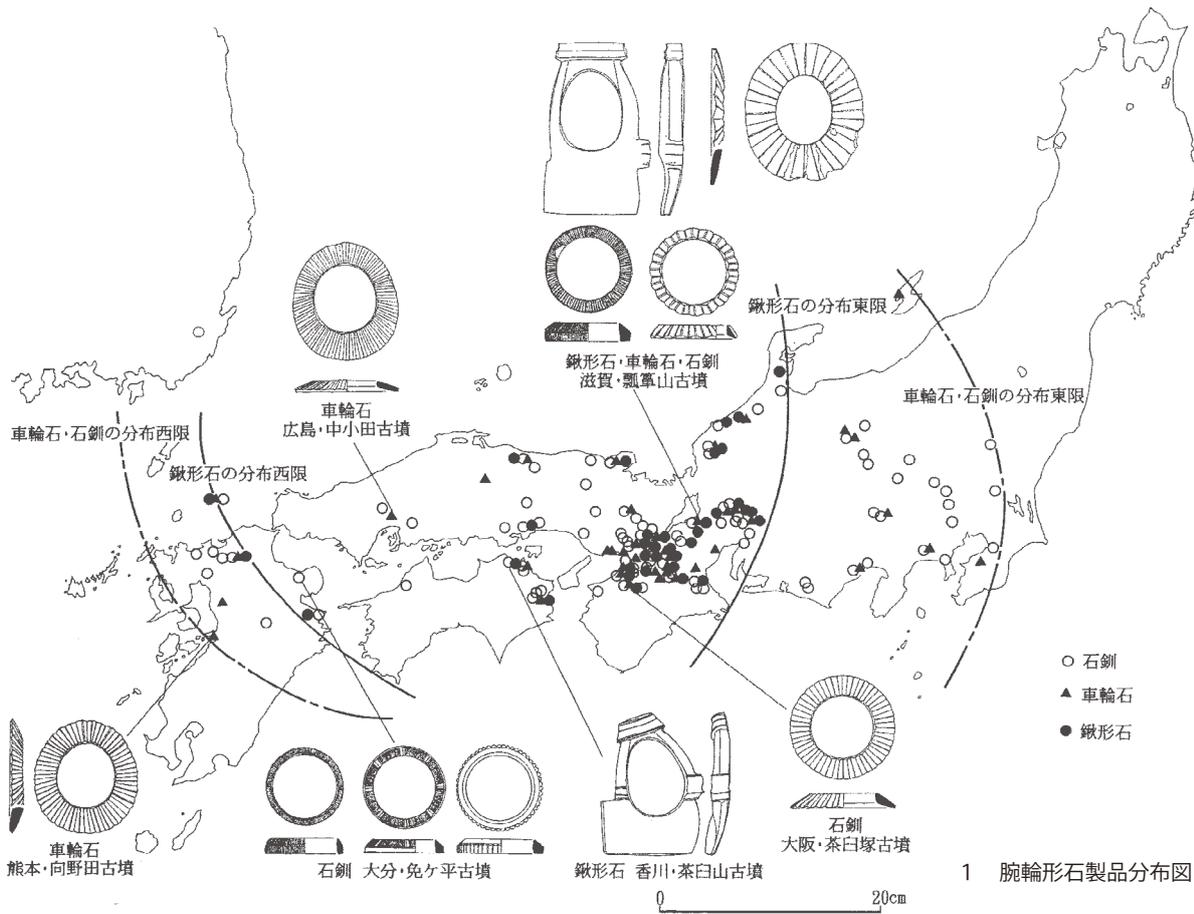
- (2) 現在の分布上、鋏形石の出土地西限であり、鋏形石がもたらされたタイミングを大きな契機とした一括の資料群との想定も可能であるが、九州の中で車輪石や石釧は複数出土していることから、必ずしも一括でもたらされたと考える必要はない。先に車輪石や石釧を所有していて、その後鋏形石も持ちうる状況が生じたことにより新たに加わった可能性など、幾つかの経緯が考えられよう。
- (3) 沖出・谷口前方部の舟形石棺と谷口後円部の長持形石棺では、縄掛突起の形状がよく似ていることから、製作にあたっての若干の時間差は存在しつつも、両者のつながりは強いことが併せて指摘されている(高木 1994)。

引用・参考文献

- 石井友菜 2019「材質と製作技術からみた腕輪形石製品の生産に関する一考察—大阪府柏原市茶臼塚古墳の分析事例から—」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第64輯 早稲田大学大学院文学研究科
- 岡寺 良 1999「石製品研究の新視点—材質・製作技法に着目した視点—」『考古学ジャーナル』No.453 ニューサイエンス社
- 小田富士雄 1986「考察」『研究紀要』Ⅲ(免ヶ平古墳発掘報告書)大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館
- 鐘方正樹 1988「碧玉製腕飾類の研究視点」『網干善教先生華甲記念考古学論集』網干善教先生華甲記念会
- 亀井明德 1982「谷口古墳」『末盧国—佐賀県唐津市・東松浦郡の考古学的調査研究—』[本文篇]六興出版
- 蒲原宏行 1991「腕輪形石製品」『古墳時代の研究』8(古墳Ⅱ 副葬品) 雄山閣
- 河村好光 1989「碧玉製腕飾類の成立」『北陸の考古学』Ⅱ(石川県考古学研究会会誌 32)石川県考古学研究会
- 小林行雄 1956「前期古墳の副葬品にあらわれた文化の二相」『京都大学文学部五十周年記念論集』京都大学文学部
- 1957「初期大和政権の勢力圏」『史林』第40巻第4号 史学研究会
- 上記論文は、ともに小林行雄 1961『古墳時代の研究』青木書店 に再録。
- 新原正典 1991「北部九州の刳拔式石棺」『古文化論叢 児嶋隆人先生喜寿記念論集』児嶋隆人先生喜寿記念事業会
- 新原正典ほか 1989『沖出古墳』(稲築町文化財調査報告書 第2集)稲築町教育委員会
- 高木恭二 1994「九州の刳拔式石棺について」『古代文化』第46巻第5号 財団法人古代学協会
- 辻田淳一郎 2019『鏡の古代史』(角川選書 630)角川書店
- 北條芳隆 1994「鋏形石の型式学的研究」『考古学雑誌』第79巻第4号 日本考古学会
- 2013「腕輪形石製品」『古墳時代の考古学』4 副葬品の型式と編年 同成社
- 松浦宇哲 2017『沖出古墳Ⅱ』(嘉麻市文化財調査報告書 第4集)嘉麻市教育委員会
- 三浦俊明 2005「車輪石生産の展開」『待兼山考古学論集—都出比呂志先生退任記念—』大阪大学考古学研究室
- 和田晴吾 2014『古墳時代の葬制と他界観』吉川弘文館

挿図出典

引用・参考文献から引用のほか、各挿図中に記載。引用・参考文献に挙がっていない報告書は、紙面の都合で割愛しています。ご寛恕ください。



出典 1 新納 泉・北條芳隆 1992 『祭祀』『図解・日本の人類遺跡』財団法人東京大学出版会 186頁 3 腕輪形石製品の分布
2 1の九州を拡大・加筆
3 下垣仁志 2011 『古墳時代の王権構造』吉川弘文館 164頁 図74

図1 腕輪形石製品 (一部他の石製品含む) の分布図

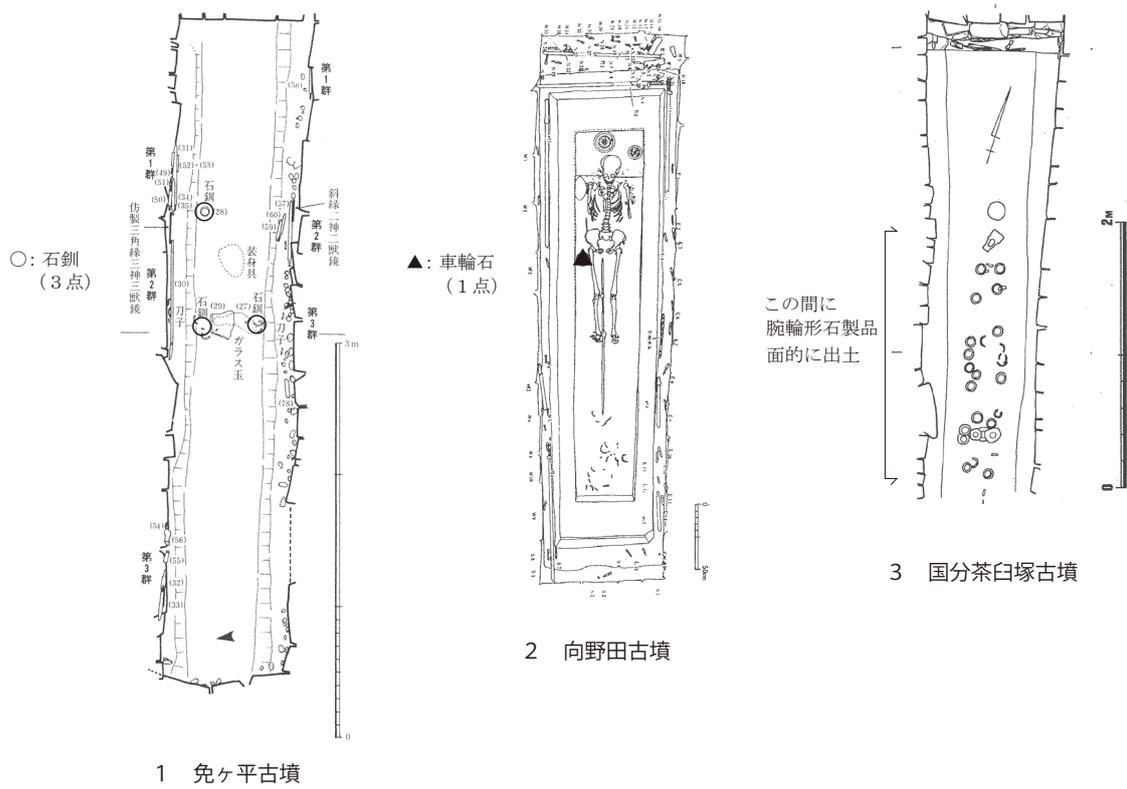


図2 腕輪形石製品の出土状況 (各古墳の報告書から引用)

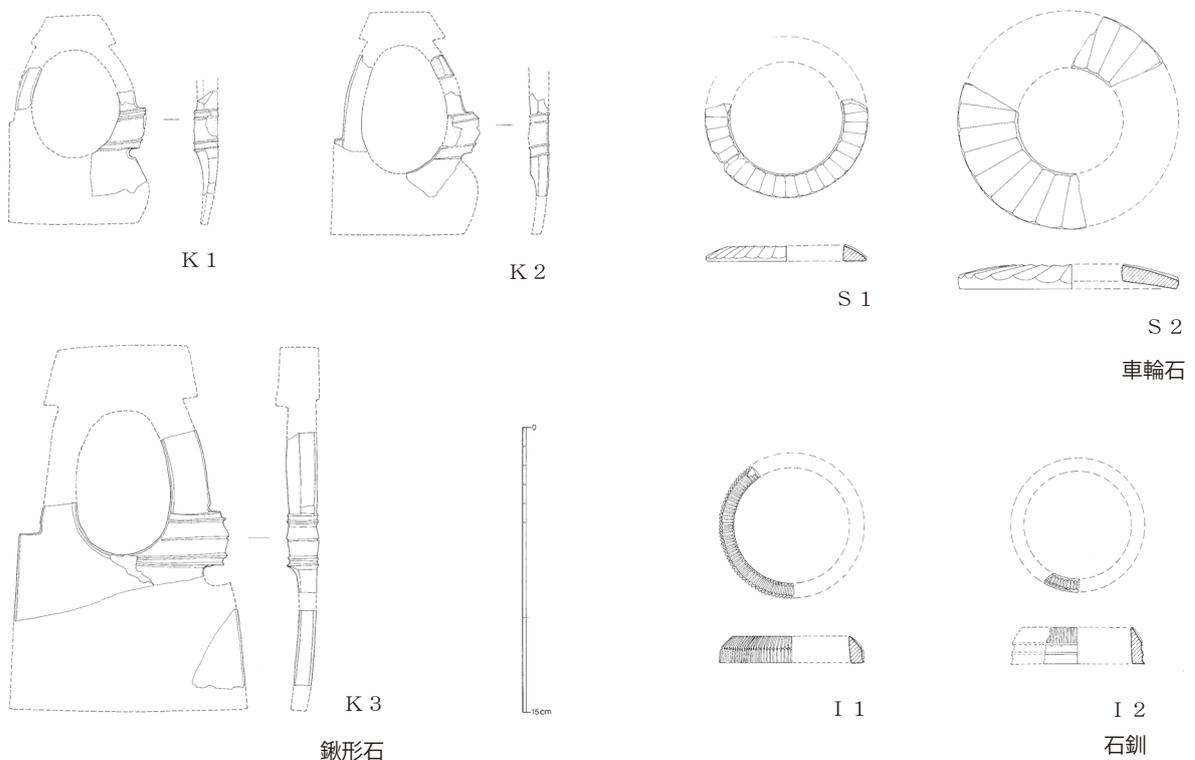


図3 沖出古墳出土の石製品 (新原 1989) から引用

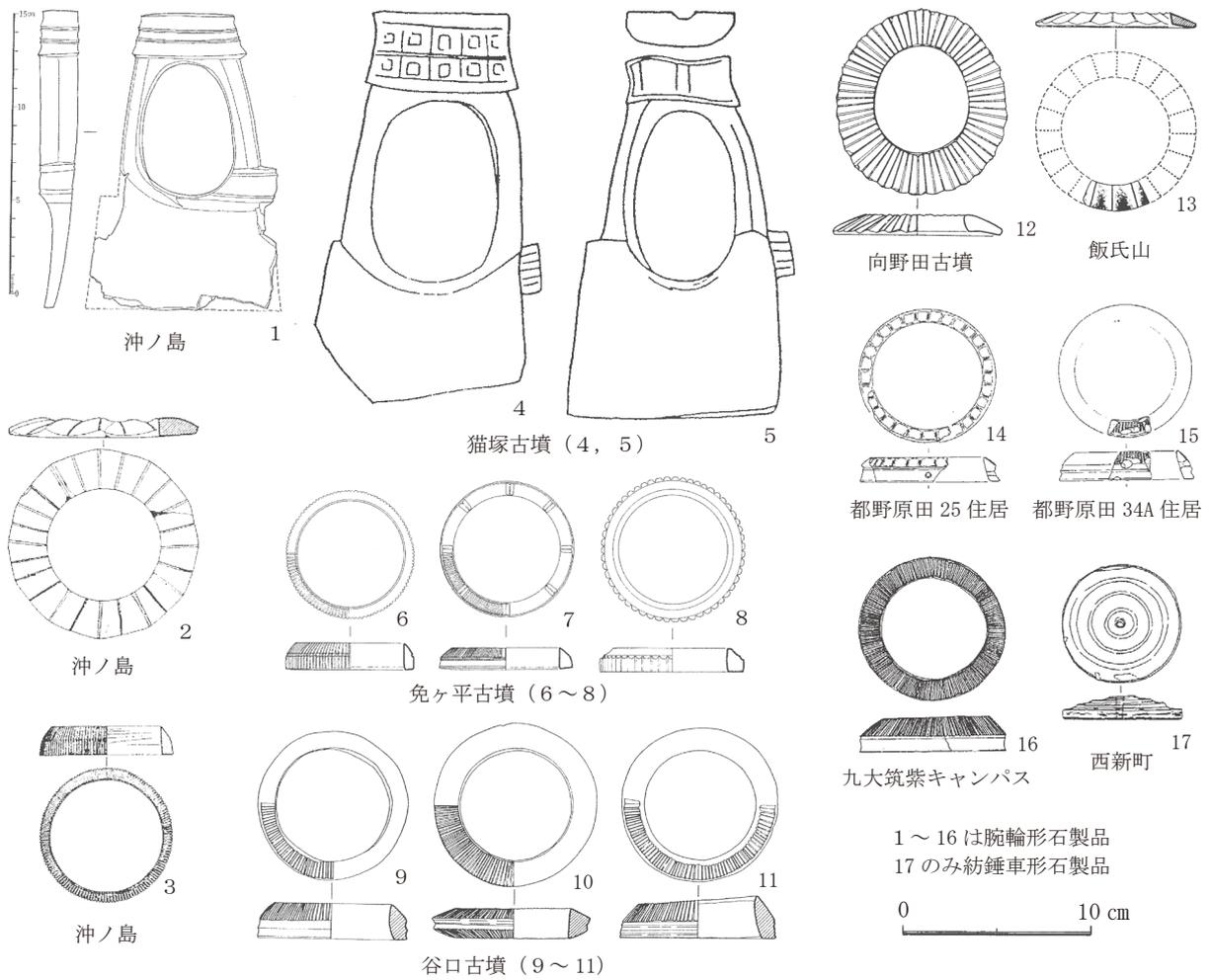


図4 九州出土の主な石製品（各遺跡の報告書から引用）

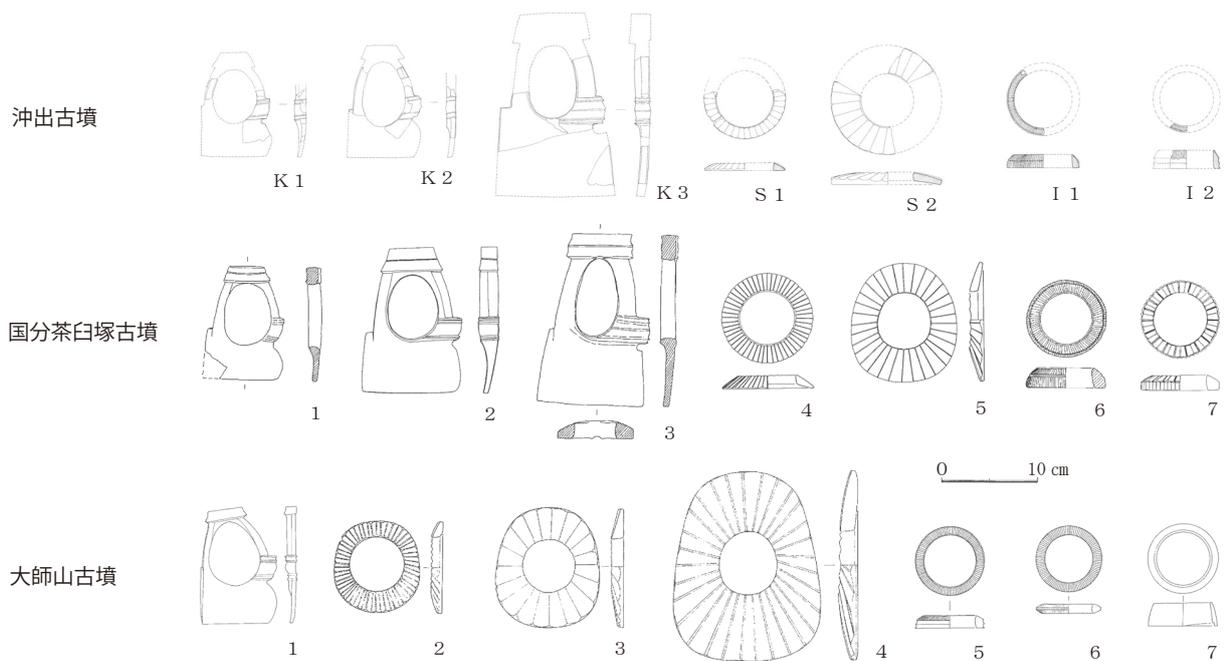
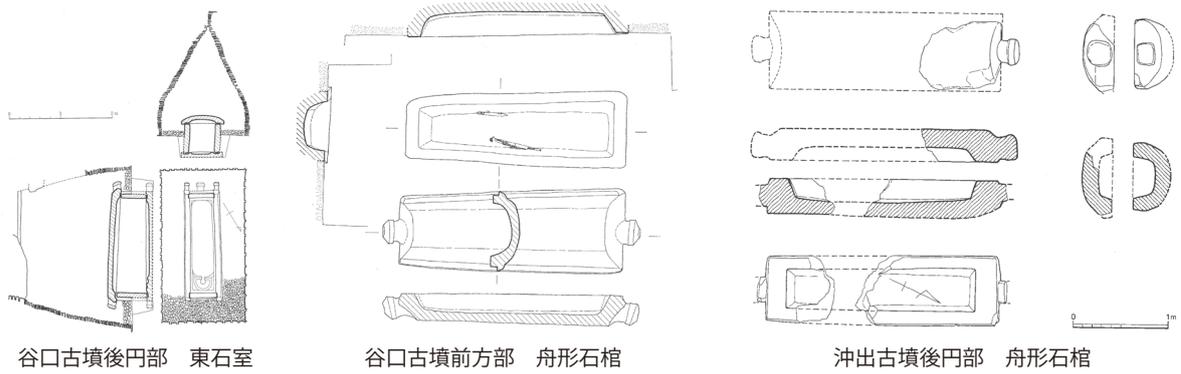


図5 腕輪形石製品の個体と構成の比較（各古墳の報告書から引用）



谷口古墳後円部 東石室

谷口古墳前方部 舟形石棺

沖出古墳後円部 舟形石棺

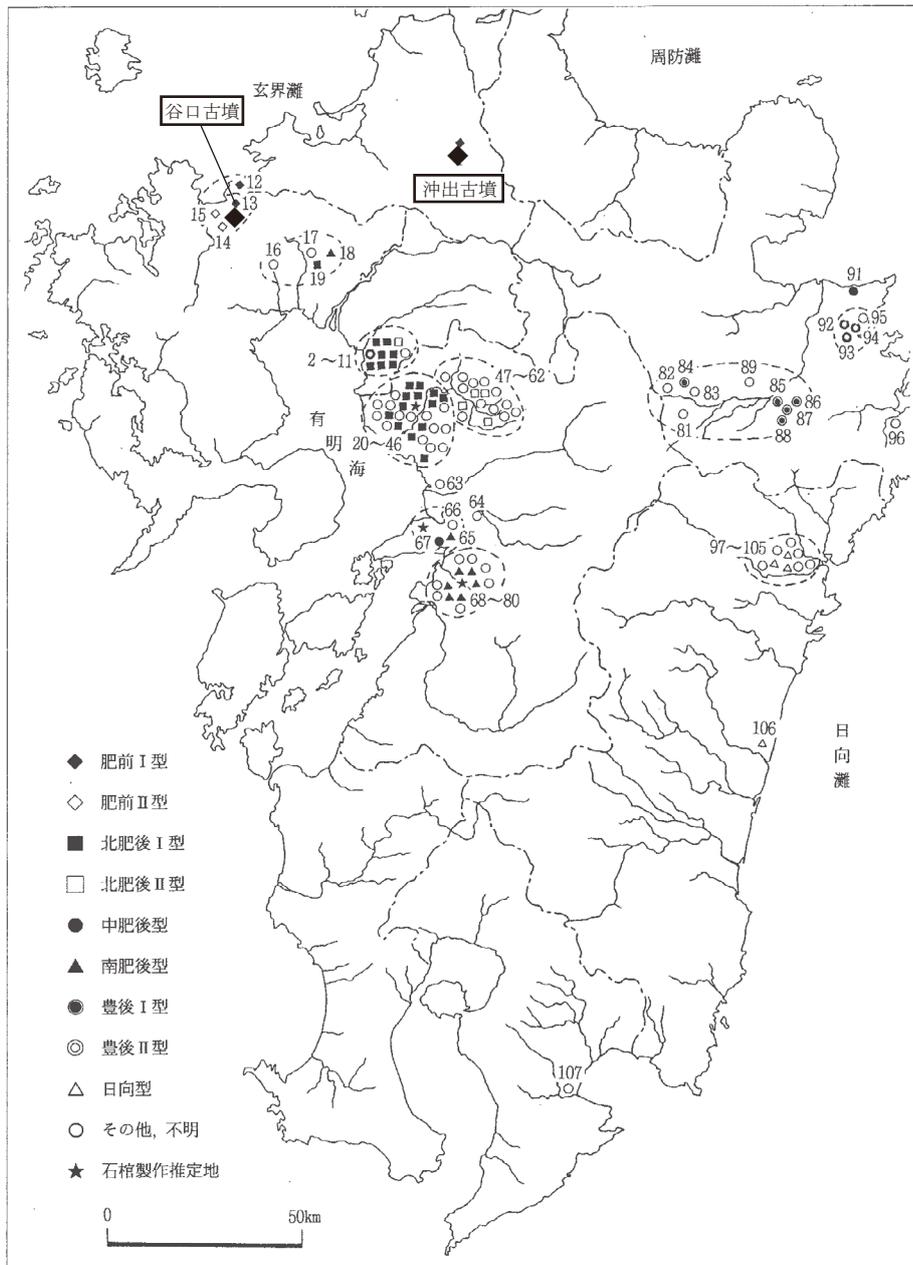


図6 九州の舟形石棺の分布と沖出古墳・谷口古墳の石室・石棺
(高木 1994、新原 1989、亀井 1982 から引用、一部加筆)

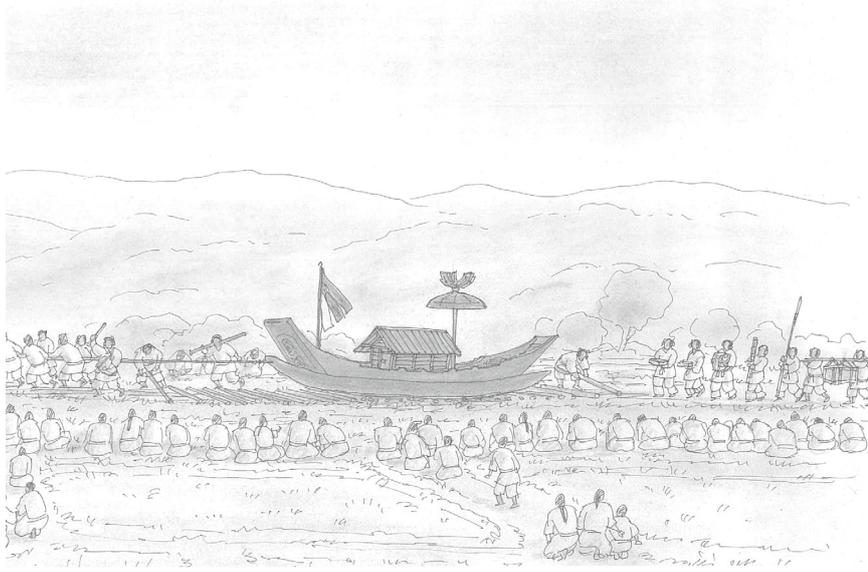


図7 古墳に向かう葬列

早川和子氏作画 兵庫県立考古博物館 2019『埴輪の世界—埴輪から古墳を読みとく—』
(兵庫県立考古博物館特別展示図録No.25) 図4を抜粋して引用

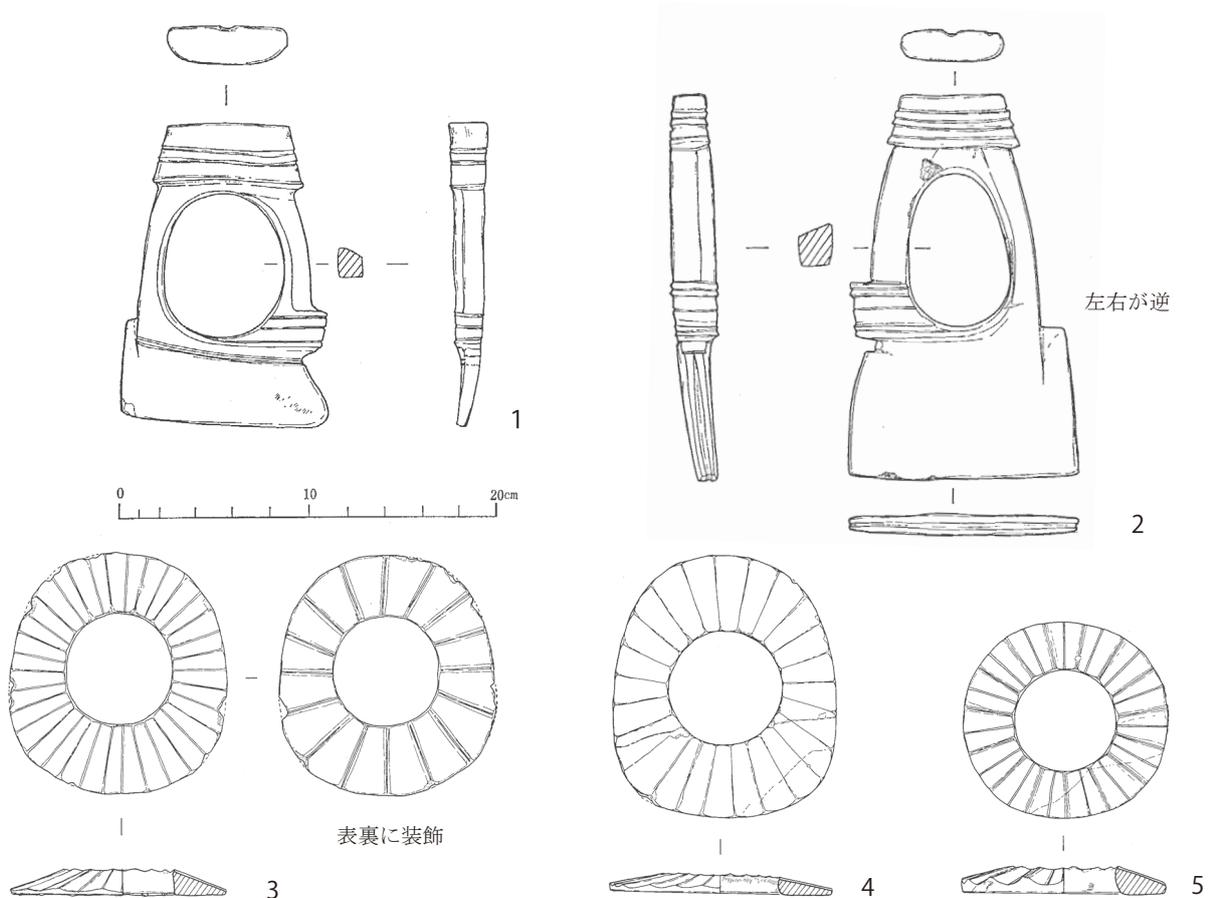


図8 (伝) 巢山古墳出土の腕輪形石製品 (上段：鍬形石 下段：車輪石)

福尾正彦・徳田誠志 1991「書陵部所蔵の石製品Ⅰ」『書陵部紀要』第42号 宮内庁書陵部 から引用

北部九州の首長墳と沖出古墳

田中 裕介(別府大学)

はじめに

古墳時代中期初頭に河内平野に進出した大王墓と共通する墳形、埋葬施設、副葬品などをもつ前方後円墳が、北部九州各地に築造されている。沖出古墳もその一つである。古墳時代中期初頭とは西暦でいえば4世紀の後半から末ごろである。そのような古墳の実例をいくつかあげてみると福岡県福岡市の鋤崎古墳、老司古墳、同県大牟田市の黒崎観世音塚古墳、大分県大分市の亀塚古墳などが、沖出古墳と同時期あるいは近い時期に築造された大型古墳としてあげられる。

どうして中期初頭という同じ時期に同一の内容を持つ前方後円墳が九州の各地に造られたのだろうか。沖出古墳がなぜこの遠賀川の上流域である嘉麻市に築造されたのか。各古墳の被葬者が葬られた地域社会を考古資料から追及して、沖出古墳の特徴を浮かび上がらせてみたい。特に沖出古墳の所在する遠賀川流域と東九州の関係を中心に考えてみよう。

1 沖出古墳の諸要素から

沖出古墳は前方後円墳である。まずこの事実から出発し、沖出古墳を構成する様々な要素を取り出して、沖出古墳の素顔を調査報告書¹のデータをもとに考えてみよう。

A 墳丘規模

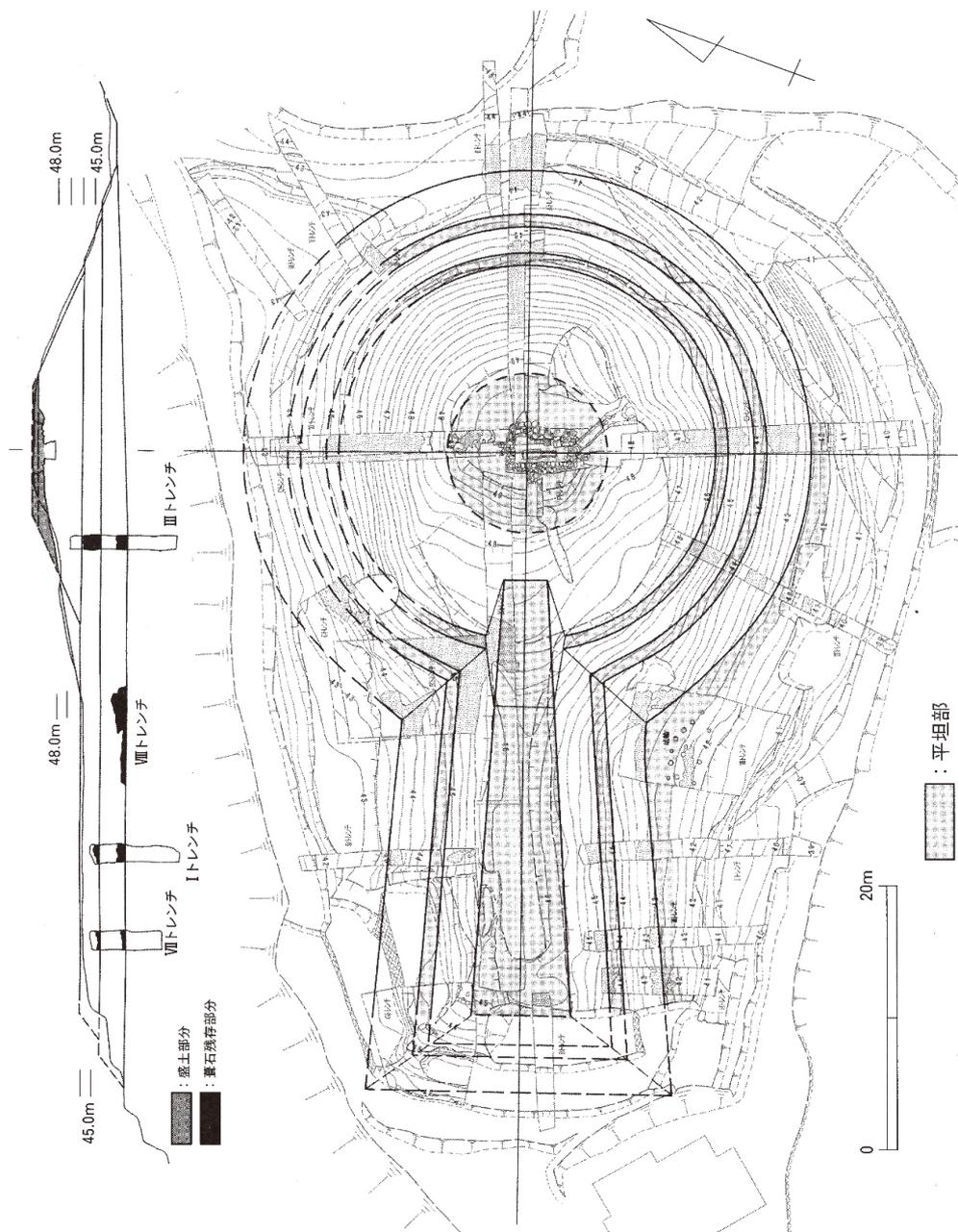
沖出古墳：墳長 69.5m、後円部径 42.4m (松浦 2017p42)。

九州各地の前方後円墳の後円部の斜面の端から前方部前線の端(図 1)までの長さを墳長と定義して測り、長い順からならべていくと、その形はなだらかな斜面になるのではなく、所々で段がつくように、いくつかの大きさで分布がまとまることが知られている(蒲原 1991、田中 1998)。それによると墳長 60m前後、45m前後の前方後円墳が多い、そこで前方後円墳の墳長規模では A 級は 65m以上、B 級は 55~65m C 級は 40~50m、D 級は 40m以下とすることができる。

沖出古墳の墳長は約 70m であるから、規模の点で A 級の大型古墳に当たる。この A 級の規模をもつ前方後円墳あるいはそれに匹敵する大型円墳(径 45m 以上)のうち、沖出古墳と近い時期の A 級規模の古墳はどこに分布しているだろうか。古墳時代前期末に遠賀川下流域では沖出古墳よりやや大きい遠賀郡遠賀町豊前坊 1 号墳(前方後円墳 74m)、遠賀郡岡垣町塩屋古墳(前方後円墳 72m)が築造される(表 1)。ところが西側の宗像地域と東側の豊前地域には 65m 以上の A 級規模の古墳は存在しないどころか B 級規模の前方後円墳も豊前宇佐の車坂古墳(61m)以外存在しない。

¹ 松浦宇哲編 2017『沖出古墳Ⅱ-平成 9・10 年度の範囲内容確認調査』(嘉麻市文化財調査報告書第 4 集)嘉麻市教育委員会

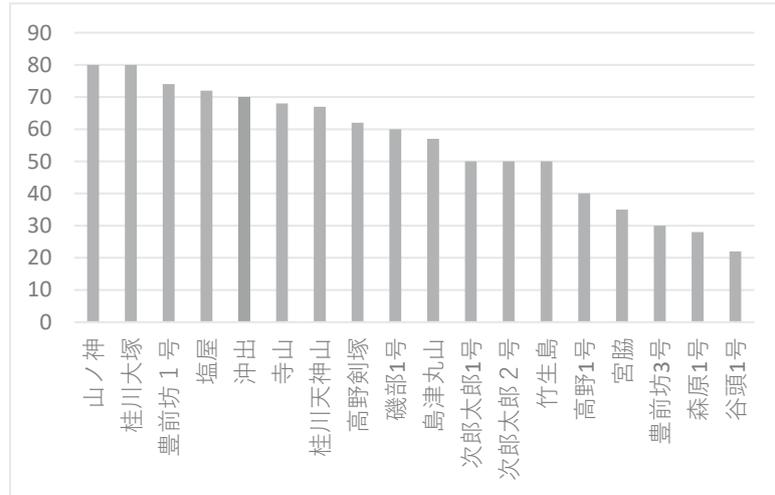
図1 沖出古墳の平面図



65m以上の規模の古墳は宮崎、鹿児島をのぞく北部九州一帯では、福岡県大牟田市の黒崎観世音塚古墳 (96m)、福岡市老司古墳 (76m) しかなく、福岡市鋤崎古墳でもその規模は62mでB級規模である。熊本県では宇土半島の天神山古墳、大分県では国東半島西部の帆立貝式古墳入津原丸山古墳 (77m)、別府湾岸の大分市亀塚古墳 (120m)、大分市築山古墳 (90m) などがあげられるに過ぎない (図2)。

このように沖出古墳は墳丘規模の点では筑前地方ではトップクラスの古墳であり、そのような規模の古墳が複数存在する遠賀川流域はこの時期でも異例である。また、沖出古墳以外の古墳がいずれも海岸部の海からみえる位置に築造されているのに対し、沖出古墳のみは遠賀川上流域の内陸平野に面している点は興味深い。

表1 遠賀川流域の前方後円墳の墳丘規模 (m)



B 墳丘形態

後円部3段前方部2段の前方後円形で造り出しなし、墳裾に削平によるテラスが存在、周囲の周溝を整えていない点が沖出古墳の特徴である。

①平面規格は渋谷向山古墳類型に当たると推定されている(澤田 2017)。澤田氏がいうところの類型墳にあたり、築造規格や技術は、倭政権中央から直接移植されたものであると考えられる。九州の前期から中期初めの前方後円墳の段構成をあげると福岡県宇美町光正寺古墳(後円部3段前方部2段)、福岡県荊田町石塚山古墳(後円部3段前方部2段)、大分県杵築市小熊山古墳(後円部3段前方部2段)、宮崎市生目3号墳(後円部3段前方部2段:造り出しなし、墳裾石敷テラス)、福岡市鋤崎古墳(後円部3段前方部3段:造り出しなし)、福岡市老司古墳(後円部3段前方部2段:造り出しなし)、大分市亀塚古墳(後円部3段前方部3段:造り出しあり)、福岡県糸島市井原1号墳(後円部3段前方部2段)、宮崎県西都市西都原13号墳(後円部3段前方部3段:造り出しなし)、西都原100号墳(後円部3段前方部2段:造り出しなし)、西都原173号墳(後円部3段前方部2段:造り出しなし)となる。

前期に後円部3段前方部2段構成で造り出しがない前方後円墳から、中期には後円部3段前方部3段で、造り出しが設けられるものが多くなる傾向にある。沖出古墳は後円部3段前方部2段の造り出しなしであるから前期的な段構成をなすが、これは平面規格が渋谷向山古墳類型に当たること由来するものと考えられる。

②中期になるとA級の大型古墳は周溝を伴うのが通例になるが、前期の大型古墳には周溝がない古墳が多い。福岡県荊田町石塚山古墳(120m)、福岡市鋤崎古墳(62m)、同市卯内尺古墳(75m以上)、同市老司古墳(76m)、福岡県小郡市三国の鼻1号墳(66m)、福岡県大牟田市黒崎観世音塚古墳(96m)、熊本県宇土市向野田古墳(86m)、熊本県宇土市スリバチ山古墳(96m)、大分県宇佐市福勝寺古墳(78m)、大分県杵築市小熊山古墳(114m)、大分市亀塚古墳(115m)などである。沖出古墳もその例にもれず周溝がない。

いっぽう前期初頭の大型古墳である福岡市那珂八幡古墳(85m 馬蹄形周溝)や、中規模の福岡県宇美町戸原大塚古墳(48m 馬蹄形周溝)、福岡県宇美町光正寺古墳(52m 前方後円形周溝)には周溝がある。ほかに前期後葉半から中期初頭の福岡県上毛町能満寺3号墳(33m)、佐賀市金立町金立銚子塚古墳(98m)、宮崎市生目3号墳(137m)、同生目5号(54m)、同生目22号(101m)、鹿児島県東串良町唐仁大塚古墳(154m)、大分県宇佐市川辺高森古墳群の赤塚古墳(58m)・免が平古墳(51m)・角房古墳(46m)、豊後高田市入津原丸山古墳(77m)などに周溝がある。

前期前半の前方後円墳は大小に関わらず周溝を持つ例が多いが、前期後半になると佐賀や宮崎、鹿児島的大型古墳を除いて、北部九州から東九州の大型前方後円墳は周溝をもたなくなり、中小の前方後円墳はかえって周溝を維持する。中期になると再び大型古墳も周溝をもち、さらに二重周溝の例が多くなる。周溝のない沖出古墳は北部九州の前期後半の大型古墳の特徴を共有しているといえる。

C 埴輪

埴輪の詳細はほかの論者に譲るとして、沖出古墳の埴輪配列の特徴を検討する。

①埴輪の配置 沖出古墳では墳頂上と墳裾に円筒埴輪と朝顔形埴輪が配置されている。後円部および前方部の墳頂に家形埴輪と器財埴輪が置かれている。円筒埴輪の配列間隔は1mほどである。

墳裾に埴輪を配列する古墳としては九州では福岡市鋤崎古墳が知られている。円筒埴輪列が墳裾を全周す

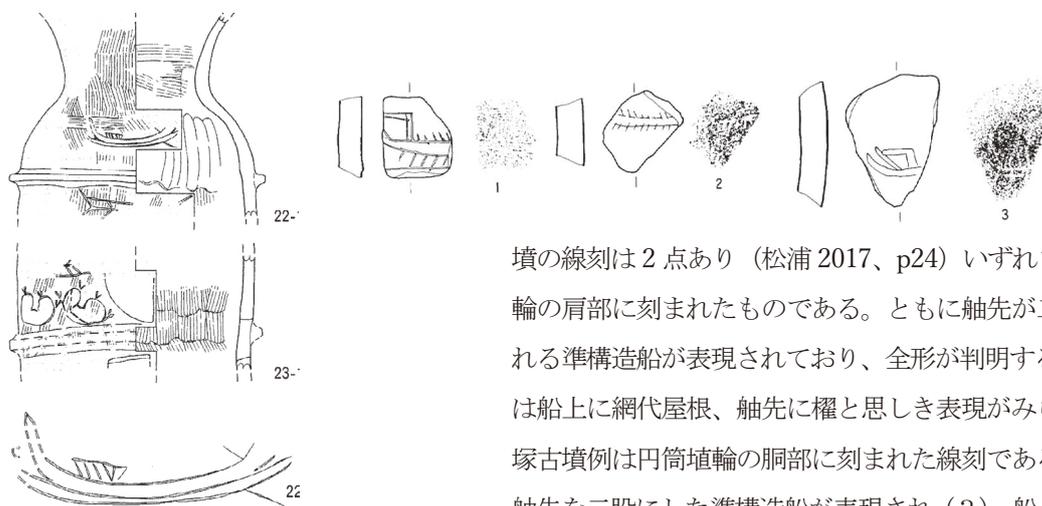
るように配置され、前方部頂にも家形埴輪を配置する点で沖出古墳の埴輪の配列とよく似ている（柳沢ほか 2002）。ただし鋤崎古墳では一段目および二段目テラス上にも埴輪が配置されている。段築テラス上の配列が報告されていない沖出古墳との相違である。東九州で埴輪の配列が知られている大分市亀塚古墳の場合は墳裾に埴輪は配置されず、各段築テラスと造り出し平坦面と墳頂平坦面に円筒埴輪と朝顔形埴輪を約 1m の間隔で配置する。ただし後円部頂のみ密接配列で大型の円筒埴輪を圍繞する（讃岐他 2000）。各種の器財埴輪は後円部墳頂と造り出し上に配置している。このように埴輪の配置をみると沖出古墳は筑前西部の鋤崎古墳と類似する点が明瞭である。

沖出古墳の壺形埴輪は後円部および前方部墳頂に配置されている。壺形埴輪を墳頂部全体に配列する前方後円墳は小郡市三国の鼻 1 号墳、福岡市卯内尺古墳、遠賀町豊前坊 1 号墳で知られている。東九州でも豊後大野市立野古墳、同重政古墳などで知られており、中期初頭になると福岡市老司古墳のように壺形埴輪主体の配置に円筒埴輪をまじえる形式に変化するが、壺形埴輪を墳頂部に多量に配置する伝統は守られている。沖出古墳の埴輪の配列も壺形埴輪の墳頂多量配置の伝統のなかに新たに持ち込まれた円筒埴輪を取り込んだ形式と言える。

②埴輪の形式構成 沖出古墳の埴輪は家形埴輪、普通円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪と壺形埴輪からなる。前期末～中期初頭の九州の大型古墳では、福岡市鋤崎古墳、大分市亀塚古墳のように家形埴輪のほかに盾形埴輪などの各種器財埴輪を有することが多いが、沖出古墳にはそれらを欠いている。その特徴は鋤崎古墳ではなく福岡市老司古墳の埴輪の構成と類似し、壺形埴輪が多い点でも老司古墳と一致する。

円筒埴輪の特徴の一つとして船形線刻があげられるが、これは九州では大分市亀塚古墳と共通する（図 3）。沖出古

図 3、沖出古墳と亀塚古墳の船の線刻



墳の線刻は 2 点あり（松浦 2017、p24）いずれも朝顔形埴輪の肩部に刻まれたものである。ともに舳先が二股に分かれる準構造船が表現されており、全形が判明する例（22）は船上に網代屋根、舳先に櫓と思しき表現がみられる。亀塚古墳例は円筒埴輪の胴部に刻まれた線刻である。やはり舳先を二股にした準構造船が表現され（3）、船上には構造物（1・3）が、両舷には多数の櫓（2）が表現されるところが沖出古墳と異なっている²。亀塚古墳では船形埴輪も出土しており別府湾を見下ろす台地という立地の

2 九州での前期から中期初頭までの船を表現したものは線刻表現では沖出古墳と亀塚古墳、舟形埴輪では亀塚古墳しかない。そのほかの例はいずれも中期中葉以後に下る。

点と考え併せると、海上交通路との密接な関係が想定される。いっぽう沖出古墳は遠賀川上流域の沖積平野を背景とした古墳で、その古墳の埴輪になぜ船形の線刻が施されているのか、不思議である。遠賀川の河川交通との関係も考えられるが、河川で利用できる船は小型のものであり舳先が二股になる準構造船が遠賀川の上流にまで行き来していたとは考えにくく、玄界灘を運航する大型船を表現したものと考えられる。後に「崗の湊」と呼ばれるようになる遠賀川河口部を往来する船舶と沖出古墳の首長が密接な関係をもっていた証拠であり、鋤崎古墳や老司古墳との関係も玄界灘の海上交通を介して連絡があったと見れば納得できる。

壺形埴輪について全体としては二重口縁形態が多く単口縁形態が少ないことが指摘されている。これは北九州で一般的なあり方である（豊前・筑前～肥後の壺形埴輪）³。東九州とくに豊後は前期中葉の立野古墳までは北部九州と同様な二重口縁形態が単口縁形態より多いが、前期末から中期前葉にかけて単口縁主体になっていく。この点では沖出古墳は明らかに北九州の古墳と同じ特徴を示す。ただし報告では（松浦 2017、p 45）沖出古墳の南側に二重口縁形態が多く、単口縁形態は前方部北側などに集中する傾向があることが指摘されており、その状況が正しければ墳丘南側の壺形埴輪は北九州の様相、北側の壺形埴輪は豊後の様相と言えるかもしれない。

以上のように壺形埴輪の様相においては豊後とは異なるが、円筒埴輪の線刻においては共通の要素が認められる。豊後の沿岸部の古墳に存在する要素と、遠賀川を經由して沖出古墳に伝わった要素は、海上ルートを通じて共通の出発点を持つと考えられる。倭王権の中枢から見れば海上交通を通して連絡するルートの先端として前期末の段階で、鋤崎古墳・老司古墳、沖出古墳、亀塚古墳の被葬者が重要な役割を果たす首長として関係が築かれたものと推定される。

D 埋葬施設

①**堅穴式石室** 報告書でも指定されているように長側壁が小口を挟み込むような特異な構造を持っており、報告者（松浦 2017、p46）は箱形石棺との類似を指摘している。しかし内部に収められた舟形石棺の石材は松浦砂岩である可能性が高く、佐賀県谷口古墳などの初期横穴式石室の主体部構造との検討が必要である⁴。この時期に豊前・豊後などの首長墳の埋葬施設は箱形石棺が大半であり、唯一舟形石棺に堅穴系石室を利用したものは大分市亀塚古墳第2主体のみである。豊後においては外来的な要素である。

②**舟形石棺** 最初の調査から砂岩製であることが指摘されている（新原 1989）。北部九州の石棺石材を分類した高木恭二氏の研究によって、沖出古墳の石棺は唐津湾岸に分布が集中する谷口古墳石棺などと同様に肥前1型に分類され、そこで使われている松浦砂岩製であると考えられている⁵

沖出古墳の石棺の型式が肥前唐津湾岸の石棺に類似することが指摘されただけでなく、神田高士氏によっ

『原始・古代の船Ⅰ』立命館大学考古学資料集5 2013 立命館大学考古学論集刊行会

³ 田中裕介 2000 「九州における壺形埴輪の展開と二・三の問題」『古墳発生前後の社会像』九州古文化研究会

⁴ 初期横穴式石室との類似については辻田 2011p75 が沖出古墳堅穴式石室と谷口古墳西石室との類似を指摘している。

⁵ 高木恭二 1987 「九州の舟形石棺」『東アジアの考古と歴史』下 同朋舎、高木恭二 1994 「九州の刳抜式石棺について」『古代文化』46-5 古代学協会

て豊後大野川上流域の舟形石棺(御祖神社石棺・石船古墳石棺など)の祖型であることも指摘されている⁶(図4)。ここでは神田氏によって大野川上流域最古の石棺とされた中期初頭の竹田市御祖神社石棺を挙げておきたい。この意見に慎重な高木恭二氏と林田和人氏⁷も豊後の舟形石棺を2分類し、系譜の異なる最古の石棺が最も西の竹田市と最も東の臼杵市に存在することは認めている。筆者は後述するように山岳の交通ルートを通じて、遠賀川上流域と大野川上流域の阿蘇外輪山周辺は交流があったものと考えており、唐津地域で松浦砂岩を用いて舟形石棺を作った石工が、沖出古墳を作った遠賀川上流域の首長を介して大分県大野川上流域に移動し、阿蘇の溶結凝灰岩を用いて石棺を作った可能性があると考えている。

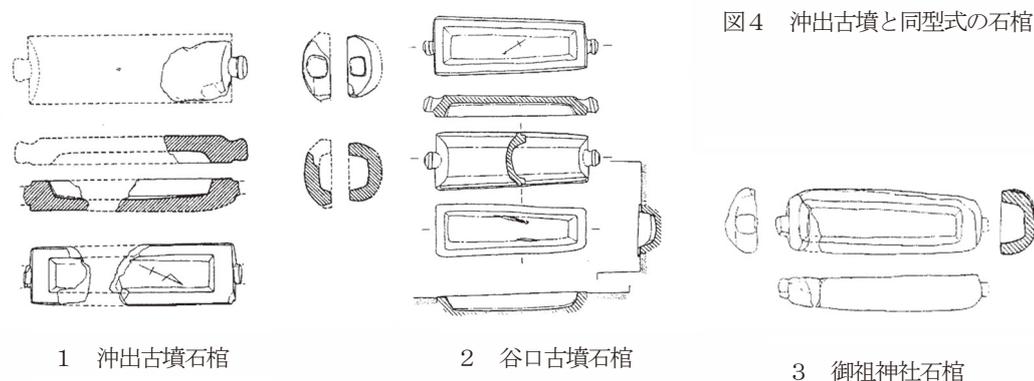


図4 沖出古墳と同型式の石棺

さらに沖出古墳の舟形石棺が属する肥前1型は、讃岐東部の石工集団の影響下に作られたことが高木氏によって指摘されており、讃岐で創始された木棺を石に移す技術が、玄界灘沿岸の松浦砂岩地帯に伝わり、そこで造られた舟形石棺が遠賀川をさかのぼって沖出古墳まで搬入されたと考えられ、石棺の点からも佐賀県北部の唐津湾周辺から福岡市の糸島地域と沖出古墳被葬者の深い関係が指摘できる。さらにその石棺が大分県の内陸山岳部と言ってもよい竹田市周辺の石棺に影響を与えたとすれば、沖出古墳の立地に示唆を与えるものであろう。図5は石棺の関係を地図に落とししたものである。なお大野川上流域の石棺に類似する石棺として宮崎県延岡市南方14号墳がある(林田1995)。この石棺も中期前葉にさかのぼる宮崎県最古の舟形石棺と考えられており、前期末から中期初めの短期間に九州の山岳ルートを通じて石棺の仕様が伝わったものと考えられないだろうか。

⁶ 神田高士 1990 「大分の舟形石棺」『おおいた考古』3 大分県考古学会

⁷ 林田和人 1995 「東九州の舟形石棺」『宮崎考古』14 宮崎考古学会、

図5 沖出古墳石棺の立地



E 副葬品

沖出古墳主体部出土の副葬品は玉類、腕輪形石製品、鉄器類等多岐にわたるが、とりわけ腕輪形石製品の鍬形石・車輪石・石釧の三点セットが揃うのは沖出古墳のみであることが指摘されている（松浦編 2017）。ここではそのうちの鍬形石をみてみよう。沖出古墳の3点以外には福岡県宗像郡沖ノ島5/6号遺跡で1点、大分市猫塚古墳で2点の出土が知られて、九州ではこの3例のみである（瀧の上 2014）。沖ノ島遺跡は朝鮮半島への海上交通路にかかわる祭祀遺跡であり、大分市猫塚古墳はかつての海部地域に属する大分市神崎に所在し、神崎築山古墳の近くにあり亀塚古墳とも数キロしか離れていない。豊後から日向に向かう海上交通路にかかわる位置にある。その観点でいえば、沖出古墳は遠賀川の河川交通と山岳ルートの接点に位置する重要な場所に立地すると言え、埴輪に施された船形線刻の分布は、沖出古墳と大分市海部の亀塚古墳に限られている分布の在り方と類似する。この点を指摘しておきたい。

2 沖出古墳の立地の特徴

以上、第1章では沖出古墳の発掘調査によって明らかとなった墳丘規模、墳丘形態、埴輪、埋葬施設、副葬品などの諸要素を検討してきた。そこから沖出古墳が玄界灘沿岸海上交通ルートを使って佐賀県北部の唐津湾沿岸の古墳群と福岡市糸島地域の古墳群との密接な関係を持っていることが判明した。そこで沖出古墳が遠賀川上流域の最後の平野である嘉麻平野がみえる台地の谷間に築造された理由を改めて考えてみたい。

海との関係 沖出古墳は、遠賀川をさかのぼって最奥の沖積平野を見下ろす位置に築かれており、遠賀川の河川交通が背景にあることは容易に推察される。鍬形石、車輪石、石釧などの畿内の倭王権からもたらされた石製品はほとんど遠賀川ルートからもたらされたことは、鍬形石が水上交通の要地に分布するあり方から推察できる。同様に水上交通を介して伝わったものに埴輪の船形線刻がある。そこからは遠賀川を介して瀬戸内とつながるだけでなく、舟形石棺が唐津湾岸からもたらされたように、玄界灘を通じて糸島や福岡平野の諸古墳と密接なつながりがあることが見えてくる。つまり沖出古墳は瀬戸内海から畿内に通じ、玄界灘を東西する海上ルートと、遠賀川という河川ルートをつうじて密接に結びついているのである。しかしそれだけではこの場所に沖出古墳という大型古墳が築かれた理由は説明できない。なぜなら内陸部の平野はここだけではないからだ。なぜこの場所の首長が大型古墳を築くことになったのか。

山との関係 沖出古墳の立地を細かく観察すると丘陵の頂上部ではなく、丘陵を開析する谷間に築かれていることがわかる。現地に立つとどうしてとなりの丘陵の上に造らなかったのかと疑問に思う。面する平野への視野は狭い。平野の集落に住む住民をあまり意識していないのではないかとさえ思う。では南側の丘陵から見るとどうだろうか。その方が良く全体像を眺めることができる。つまり沖出古墳は平野から見あげる古墳ではなく、南の丘陵から見下ろす古墳である。そうした場所に作られたのは沖出古墳の立地する嘉麻平野は遠賀川上流域の最後の平野であると同時に山地へ上る最後の平野でもあり、平野と山地の接点を意識したからではないだろうか。山地に上れば日田盆地まですぐである。遠賀川上流域と日田盆地が山地の交通路を介して結びつく例は、沖出古墳の隣接地に築造された古墳時代後期初頭の次郎太郎古墳群から出土した須恵質の壺形土器と同型式の壺が後期前葉の大分県日田市天満2号墳でも多数出土しており、後期前半に遠賀川上流域から内陸の日田盆地に至る交通路が機能していたことを物語る。

さらに沖出古墳の舟形石棺が大分県大野川の上流域の標高500mをこえる菅生台地上（阿蘇外輪山の裾野である）の古墳に使用された石棺の祖型になったとすれば、日田盆地から天ヶ瀬を抜けて久住あるいは小国を抜けて大分県竹田市に至る山上の陸路を通じて伝わったことは容易に想像できる。この道はさらに宮崎県高千穂に通じ、そこから五ヶ瀬川を下ると宮崎県北部の延岡地方につながっている。

この九州の脊梁を南北に通じる山上の道は、沖出古墳の立地する遠賀川ルートからのみならず、豊前の山国川上流域、福岡県の筑後川の上流域、熊本県の阿蘇白川の上流域、大分県大野川の上流域からもアクセス可能である。そのため類似する立地をとる古墳群が存在する。筑後川上流域のうきは市若宮古墳群、阿蘇の中通古墳群、竹田市の七ツ森古墳群である。いずれも河川交通と山岳交通の結節点に築造された首長墳で、山岳交通路の発起点となりうる場所に古墳群が展開している。

このように沖出古墳の首長は、九州の山岳地と玄界灘をつなぐ交通の結節点に存在する首長であって、前期末から中期初頭の時期にこの山岳のルートに連結する使命の重要性が生じ、その果たす役割の大きさをゆえに倭王権より協力のもと大型古墳の築造を許されたと考えられる。

なお大分の刳抜式石棺については井大樹氏（大分県教育庁文化課）に教示を得た。

参考文献

- 新原正典 1989 『沖出古墳』 稲築町文化財調査報告 2 稲築町教育委員会
- 蒲原博之 1991 「佐賀平野の首長墓系譜とその画期」『交流の考古学』肥後考古学会
- 林田和人 1995 「東九州の舟形石棺」『宮崎考古』14 宮崎考古学会
- 田中裕介 1998 『大分の前方向後円墳』大分県文化財調査報告 100 輯 大分県教育委員会
- 讃岐和夫ほか編 2000 『亀塚古墳整備事業報告』大分市教育委員会
- 第 3 回九州前方向後円墳研究会実行委員会編 2000 『九州の埴輪 その変遷と地域性』九州前方向後円墳研究会
- 柳沢一男ほか編 2002 『鋤崎古墳』福岡市埋蔵文化財調査報告書 730 福岡市教育委員会
- 日本考古学協会 2010 年度兵庫大会実行委員会編 2010 『日本考古学協会 2010 年度兵庫大会研究発表資料集』（古墳時代の棺とその歴史的意義）
- 辻田淳一郎 2011 「九州における竪穴系埋葬施設の展開」『九州島における古墳埋葬施設の多様性』（第 14 回九州前方向後円墳研究会宮崎大会発表要旨集）九州前方向後円墳研究会
- 瀧の上隆介 2014 「腕輪形石製品」『古墳時代の地域間交流 2』（第 17 回九州前方向後円墳研究会大分大会発表要旨集）九州前方向後円墳研究会
- 松浦宇哲 2017 『沖出古墳Ⅱ』嘉麻市文化財調査報告 4 集 嘉麻市教育委員会
- 澤田秀実 2017 『前方向後円墳秩序の成立と展開』同成社

○ 用語解説 ○

朝顔形円筒埴輪(あさがおがたえんとうはにわ) 筒状の器台の上に壺をのせた形を一体的に表している土製品で、口の部分が朝顔の花のように開いていることからこのような名称が付いている。朝顔形埴輪とも略称する。

網代文様(あじろもんよう) 細く裂いた竹・ヒノキ材やヨシなどを手織り風に編んだもので、家形埴輪の屋根や壁などにこの模様の表現がみられる。

腕輪形石製品(うでわがたせきせいひん) 貝製腕輪をかたどった古墳時代の石製品の総称。形状の違いから3種類あり、それぞれ楸形石(くわがたいし)、車輪石(しゃりんせき)、石釧(いしくしろ)と呼ばれている。

沖ノ島(おきのしま) 宗像大社の神領で、玄界灘に浮かぶ孤島。古墳時代には古墳の副葬品と同様の貴重な品々が奉納されている。

器財埴輪(きざいはにわ) 古墳に立て並べられる武器・武具や威儀具の形をかたどった土製品の総称。

器種(きしゅ) 使う用途・形状によって土器などを区分するとき用いる。

基壇(きだん) 墳丘の土台にあたる部分で、固い地山を削り出して造成することが一般的。

形象埴輪(けいしょうはにわ) 古墳に立て並べる「家」、「船」、「盾」、動物、人物などをかたどった土製品の総称。

小型丸底土器(こがたまるぞこどき) 古墳の祭祀などに用いられた素焼きの土器で、大きく開く口と球形の胴、丸い底が特徴の土器。

古墳時代(こふんじだい) 古墳時代は、前方後円墳が造られた時代と定義されることも多くなった。その場合、実年代では、3世紀半ば前後から6世紀末前後にあたる。

三角縁神獣鏡(さんかくぶちしんじゅうきょう) 青銅製の鏡で縁の断面が三角形をなす。背には半肉彫りの神獣像が表現される。古墳時代前期の主要な副葬品。

朱(しゅ) 硫化第二水銀の実用名、水銀朱ともいう。天然には辰砂として産出。

首長墳(しゅちょうふん) ある一定の地域を代表するリーダー、指導者、支配者等が埋葬されたと推定される古墳に対して便宜上、用いる。

準構造船(じゅんこうぞうせん) 丸木舟を船底にして、側板などの船材を上部に組み合わせた船体をもつ。主に海洋船に用いられた。

前方後円墳(ぜんぽうこうえんふん) 古墳時代を象徴する墳墓で大型のものは近畿に多い。天皇陵の多くは前方後円形をなす。

他界観念(たかいかんねん) あの世、死に対する考え方、見解。

高杯(たかつき) 長い脚をもつ土器。弥生時代以降、壺、甕とともに主要な器種の一つ。

高床式(たかゆかしき) 地面に柱を立て地面より上に床を張った建物の型式の一つ。

竪穴式石室(たてななしきせきしつ) 主に古墳時代の前半期にみられる埋葬施設の種類。埋葬が終わった時点で天井石を架けて封鎖し、原則的に追葬ができない構造となっている。

○ 用語解説 ○

段築(だんちく) 古墳を造るときは、斜面を段々に構築し、斜面と斜面の間には、テラス(平坦面)を設けることが多い。墳丘の規模や時期によって段構築の在り方は変わる。

単口縁(たんこうえん) 壺の口の部分の形状を表す用語で、口が上方に向かってまっすぐに開くもの。

直弧文(ちよっこもん) 直線と弧線で構成される古墳時代の幾何学的な文様的一种。石棺、埴輪、銅鏡などに描かれている。

造り出し(つくりだし) 前方後円墳のくびれ部に設けた半円形もしくは方形の突出した壇状の施設。埴輪などを配置し祭祀空間として利用されることもある。

壺形埴輪(つぼがたはにわ) 壺を模した土製品で底部は作られていない。この埴輪は、飲食物を供献する行為を象徴するものと考えられている。

トレンチ 遺跡を発掘調査するときに内部の様子を確かめるために掘る試掘溝。

長持形石棺(ながもちがたせっかん) 古墳時代の組合式石棺の一種。主に近畿の有力層の古墳を中心に用いられた。

二重口縁(にじゅうこうえん) 壺の口の部分の形状を表す用語で、口の途中でいったん屈曲して開いているもの。

ハケメ調整(はけめちょうせい) 手で握れる大きさの板材を用いて、焼成前の土器・埴輪などの表面を搔きならして器面を整える技法。

箱形石棺(はこがたせっかん) 板石や扁平な自然石を箱形に組合せた石の棺。

普通円筒埴輪(ふつうえんとうはにわ) 古墳の墳丘上に垣根のように立て並べる筒形の土製品。古墳を外界と区画したり、荘厳化したりする役割がある。円筒埴輪とも略称する。

舟形石棺(ふながたせっかん) 古墳時代のくりぬき式石棺の一種。九州などの有力層の古墳を中心に用いられた。

碧玉(へきぎよく) 考古学では、緑色凝灰岩、蛇紋岩、珪質頁岩など不透明で緑色ないし青緑色の美しい石材を一括りで呼称している。

辟邪(へきじゃ) にらみつけることで、悪霊・邪悪・災厄を寄せつけないようにする魔除け。

ベンガラ 黄赤色の顔料で、成分は酸化第二鉄。朱より容易に調達することができる。

帆立貝式古墳(ほたてがいしきこふん) 円墳に造り出しが付設されている古墳で、全体の平面形が帆立貝形となる。

鉈(やりがんな) 木材を加工する鉄製工具の一種で、斧や鎌などと共に、古墳へ副葬されることもある。

横穴式石室(よこあなしきせきしつ) 古墳時代の後半期に流行する埋葬施設の一種。羨道と出入口を備えて追葬が可能な構造である。

倭王権(わおうけん) 「ヤマト王権」、「ヤマト政権」などと呼称されることもある。「倭(わ)」は当時の「日本」の呼称。古墳時代においては、現在の奈良・大阪に中心的な政体があった。

座談会の記録

コーディネーター：古谷 毅（京都国立博物館）

～発表者/座談会参加者～

犬木 努（大阪大谷大学）

清喜裕二（宮内庁書陵部）

田中裕介（別府大学）

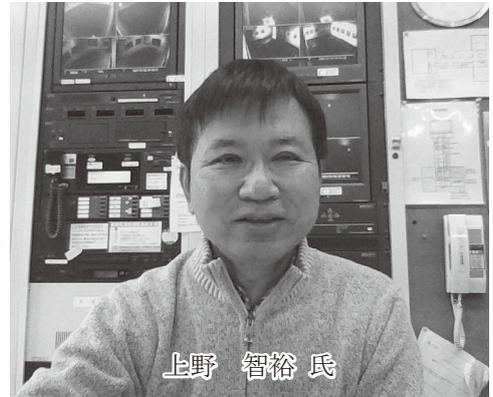
上野智裕（嘉麻市教育委員会）

松浦宇哲（嘉麻市教育委員会）

○発表 1 : 「沖出古墳」の調査

(上野)

平成 9・10 年度に実施した第 2 次調査を中心に報告します。昭和 62・63 年度の第 1 次調査では、墳丘規模と主体部確認を目的として実施され、段築の状況や墳丘規模を確定するための成果が得られましたが、前方部やくびれ部幅の確定までには至りませんでした。第 2 次調査では、第 1 次調査の成果と課題を踏まえ、11 箇所の調査区を設定(写真 ①)し、浮いた葺石の除去を徹底したところ各トレンチで葺石の基底部を検出することができました。



まず、南側くびれ部の調査(写真 ②)ですが、葺石は全体に大振りの石材を用いており、石を葺くというよりは、貼り付けているという感じの印象を受けました。また、本調査区で埴輪列を初めて確認できたことは大きな成果となりました。一方、北側くびれ部の調査(写真 ③)については、南側の葺石とは様相が異なり、多様な石材を細かく利用している状況がみられました。また、後円部と前方部の境には大振りの石材を縦列に用いるなど、葺石の作業単位と思われる縦横に走る区画石列も検出できましたが、テラス面は狭く南側のような埴輪列については確認できておりません。

次に後円部の調査です。全体に共通する点として、葺石の基底部には大振りな砂岩の割石を用いて、その上に砂岩割石や川原石を積み上げ、特に上段は川原石を丁寧に積み上げている状況がみられました。南側に比べて北側は、葺石の途中で段を設けるなど傾斜がきつく、後円部の北側は扁平な円形を呈するものと思われます。くびれ部と同様に平野側に面した南側を重視した造りとなっていることが、後円部の調査でもうかがわれました。

前方部については、北側で船の線刻埴輪のほか単口縁タイプの壺形埴輪がまとまって出土していることが特筆されます。

最後に、沖出古墳の保存整備と活用についてお話しします。沖出古墳の整備にあたっては、2 次にわたる調査の成果に基づき古墳全体の復元を実施しました。まず、表土を剥ぎ取り、保護層として 30~50cm の盛土を施した後、人力で葺石の復元を行っています。北側くびれ部については、実際に出土した葺石を再利用して復元しました。竪穴式石室については、損壊が激しい箇所は復元して、盗掘坑を利用して見学できるよう工夫しました。埴輪については、多数の破片が出土しましたが、整備にあたっては、出土位置が明らかなもののみを復元しています。

平成 15 年に史跡公園としてオープンし、現在は、一目で分かる前方後円墳として、小学校の遠足や「遠賀川流域古墳等同時公開事業」などで市内外の多くの人々に利用していただいております。

※発表 2~4 については、発表資料(P9~38)をご参照下さい。



①第2次調査 調査区配置



②南側くびれ部と埴輪列の調査



③北側くびれ部の調査

○座談会「沖出古墳をめぐる諸問題」

(古谷)

それでは、これより4名の皆さんの発表を踏まえて座談会を始めます。進行につきましては、発表の順番とは、若干異なりますが、事前に発表者の原稿を確認させていただきましたので、大きく次の3点に問題点を分けて議論してゆきたいと思います。

はじめに、「1. 内部施設の特徴と問題点」について確認したいと思います。沖出古墳の埋葬施設については、沖出古墳の石棺石材が佐賀県唐津産の松浦砂岩である可能性が高いということや谷口古墳（佐賀県唐津市）と石棺の形状が類似するなど、田中さんの発表では西方地域との交流がうかがえるという特徴がみられました。

また、沖出古墳の副葬品である腕輪形石製品については、九州地方での類例をみてみますと、鍬形石が沖ノ島祭祀遺跡（福岡県宗像市）・猫塚古墳（大分県大分市）、車輪石が向野田古墳（熊本県宇土市）、石釧が免ヶ平古墳（大分県宇佐市）・谷口古墳などにみられるということです。腕輪形石製品が九州地方で3点そろって出土している遺跡は、沖出古墳と沖ノ島祭祀遺跡であるということで、清喜さんの発表では、こうした沖出古墳の腕輪形石製品にみられる様相は、畿内地方の多量副葬の縮小版というような評価がなされていたと思います。

次に、「2. 埴輪の特徴と問題点」については、座談会のメインの議論として取り上げます。沖出古墳の埴輪は、少数の器財形埴輪と多数の土器系埴輪（円筒形・壺形）で構成されています。この時期、畿内地方では器財形埴輪が出現しており、北部九州地方でも鋤崎古墳（福岡県福岡市）のように、複数種類の器財形埴輪がみられるケースもありますが、沖出古墳では家形埴輪だけがみられるということです。

沖出古墳のような円筒形と壺形の埴輪を両方含む古墳について、これらの比率等に注目して分類すると、次のように大きく4つの類型に分けることができるのではないかと思います。1つ目は、壺形埴輪主体型a類で、九州地方では老司古墳（福岡県福岡市）や勘助野地古墳（大分県中津市）など、畿内地方では壺井御旅山古墳（大阪府羽曳野市）などがあります。壺井御旅山古墳では埴裾部に壺形埴輪を巡らして、埴頂部に円筒形の埴輪が少量みられるようです。2つ目は、壺形埴輪主体型a類と似ていますが、壺形埴輪主体型b類として分類できる例で、埴輪構成がしっかり分かる例としては青塚古墳（愛知県犬山市）があります。前方部の方形壇のみに鱗付朝顔形埴輪と円筒埴輪が少数みられ、他は埴丘部が全て壺形埴輪という構成です。3つ目は、円筒・壺形埴輪並列型で一定量の円筒形と壺形がそれぞれ使い分けられているもので、沖出古墳もこれに属するのではないかと思います。4つ目は円筒埴輪主体型で、これが全国的には一番数が多いと思います。例えば、宝塚1号墳（三重県松阪市）では、造り出しに壺形埴輪が16個樹立されていて、埴丘部には多量の円筒形の埴輪が巡らされています。我々が一般にイメージする古墳というものは、このような円筒埴輪主体型の古墳であろうと思います。



また、円筒形の埴輪と壺形埴輪が古墳のどの部分に配置されるのかという問題も重要と思います。例えば、老司古墳では、後円部にごくわずかの円筒埴輪が樹立していたのに対し、青塚古墳では、前方部の方形壇のみに円筒形の埴輪がみられます。こうした古墳と沖出古墳とを対比することで、沖出古墳の位置付けも明確になるのではないかと思います。

そして、最後の「3. 沖出古墳の歴史的位置」については、ここまでの議論を踏まえたところで、それぞれのテーマで発表いただきました皆さんの今後の展望を含めて沖出古墳の評価とその被葬者像を確認し、まとめにしたいと思います。

1. 内部施設の特徴と問題点について

①埋葬施設について

(古谷)

ここでは、埋葬施設の問題点と副葬品について取り上げます。まず、沖出古墳の埋葬施設について少し確認しておきたいと思いますが、沖出古墳の竪穴式石室の特徴について、田中さん、コメントをお願いできますでしょうか。

(田中)

沖出古墳の報告書でもすでに指摘されているところですが、小口面を側壁で挟むという特殊な構造の石室となっています。佐賀県の谷口古墳のような初期横穴式石室の可能性を考える必要がありますが、上部構造が破壊されていたため、詳細が分からないというのが現状です。

(古谷)

沖出古墳と谷口古墳の石棺型式についても類似した点が見られるということでしたが、沖出古墳の舟形石棺の石材については、佐賀県唐津産の松浦砂岩とみてよいのでしょうか。

(田中)

石棺研究の中では、数多くの石棺を実見されてきた熊本県の高木恭二さん（当時宇土市教育委員会）をはじめ、沖出古墳の石棺についても松浦砂岩製とする見方が主流となっています。上野さん、沖出古墳の報告書作成時には、地質学方面からの石材鑑定はなされていましたか。

(上野)

第1次調査時に、唐木田芳文先生（当時西南学院大学）が鑑定されており、報告書では地元の粗粒砂岩として推定されています。

(古谷)

北部九州地方で、松浦砂岩のほかに石棺の石材に用いられている砂岩があるのかどうかの一つポイント



田中 裕介 氏

トになるかと思えます。現時点でそうした石材が確認されていないのであれば、石棺の型式と石材との相関性から松浦砂岩の可能性が高いというところですが、まだ確定されているわけではないということですね。

②石製品について

(発表3：清喜資料の補足)

(清喜)

・腕輪形石製品の分布状況について (P24 図1)

図1-1は、東海大学の北條芳隆さんが作成された図で、現在も腕輪形石製品の分布域は大きく変わっていません。ただ、車輪石・石釧の分布東限については、大安場古墳(福島県郡山市)で車輪石が発見されているので、福島県猪苗代湖の辺りまで若干分布域が広がっています。

図1-2は近年の出土状況を踏まえ、図1-1に加筆して九州地方の分布域を示したものです。板平遺跡(宮崎県日向市)で車輪石が出土し、太平洋側での類例が増えましたが分布域の西限については変わりありません。

図1-3は、京都大学の下垣仁志さんが作成された図で、腕輪形石製品の分布パターンをグラフで表したものです。政権の中核部である近畿地方に大量の出土があり、近畿地方から離れていくにしたがって、出土量も減少している状況が分かります。このグラフで見れば、沖出古墳は、西限(図中左端)に近い位置にあたることとなります。

・腕輪形石製品の出土状況について (P25 図2)

九州地方での出土状況が分かる事例として、大分県の免ヶ平古墳と熊本県の向野田古墳を挙げています。免ヶ平古墳では3点の石釧が被葬者の頭部と左右の手首の辺りから出土し、向野田古墳でも、手首の辺りから車輪石が出土しています。出土状況からは共に装身具的な性格があったものと思われる。これに対して、近畿地方の国分茶臼塚古墳(大阪府柏原市)では、人体を覆うように多量の腕輪形石製品が副葬されており、免ヶ平古墳例や向野田古墳例とは異なる性格付けができる事例として紹介しておきます。沖出古墳の場合も、後者に近い位置づけになるのではないかと思います。

(古谷)

清喜さんから、沖出古墳の石製品について発表がありましたが、石製品は埴輪などと違って大きく移動するものでありますので、例えば石材からどんなことがいえるのか、九州地方の腕輪形石製品を出土した古墳について補足などがあればお願いします。

(清喜)

確かに石製品の場合、石材から地域や時期を限定したり確定したりすることは難しい面がありますが、例えば高松茶臼山古墳(香川県高松市)の鍬形石であるとか、向野田古墳の車輪石のように型式学的に

古く位置付けられる腕輪形石製品は、島根県の出雲石のような深緑色の石材を選択している傾向が認められていて、そのようなものは製作時期も古く考えてよいのだらうと思います。また、免ヶ平古墳の石釧も同じく九州地方では古手のもののだらうと考えています。

しかし、腕輪形石製品の型式は、古墳時代前期の比較的早い段階で出揃ってしまいますので、その後の生産や流通の体制がどうなっていたかについては、議論があるところです。沖出



古墳から出土した縞状の模様がある石材を用いた大型の鍬形石についても、こうした新しい段階に出現する石製品であるために、一定の時期幅が想定されるもののだらうと思います。

(古谷)

では、新しい段階に出現する腕輪形石製品の用途は、古いものと比べて違いはあるのでしょうか。また、沖出古墳の被葬者像に関わるものなのかどうか、教えてください。

(清喜)

新しい段階の腕輪形石製品は、古墳の副葬品だけではなく、多様な用いられ方をする傾向があります。例えば、平等坊・岩室遺跡（奈良県天理市）、中沢遺跡（滋賀県草津市）のように河川の流路跡や土坑から縞状の模様をもつ大型の鍬形石が出土した事例があります。

(古谷)

藤江別所遺跡（兵庫県明石市）では、井戸からも車輪石が出土していますね。これらは祭祀的な用いられ方をしているとみてよいのでしょうか。

(清喜)

はい、沖出古墳から出土した3種の腕輪形石製品についても、祭祀的な用いられ方をするようになった段階のものを含むセット関係と評価することができると思います。

(古谷)

そうすると、沖出古墳の腕輪形石製品は、被葬者の性格に関わるものと必ずしも考える必要はないのですか。

(清喜)

そこは、判断が難しいところです。ただ、私は沖出古墳の被葬者と沖ノ島祭祀遺跡（福岡県宗像市）との関係を積極的に評価したいと考えています。

(古谷)

もう一つ、確認しておきたいのですが、沖出古墳に3点の腕輪形石製品が副葬されていることを「畿内の縮小版」と評価されましたが、これは、畿内地方の古墳にみられる葬送儀礼に近いものが沖出古墳でも行われたということだったのでしょうか。

(清喜)

はい、そのように考えています。

2. 埴輪の特徴と問題点について

(発表2：犬木資料の補足)

(犬木)

・沖出古墳出土円筒埴輪・壺形埴輪の分類について (P14～15 図3・4)

①普通円筒埴輪 (円筒埴輪)

A類：最上段が幅広で、突帯の突出度が高いもの。少数存在。

Ba類：口縁部をつまみ上げて整形、有段口縁の名残とも考えられるもの。少数存在。

Bb類：最上段が幅狭で多数存在。形態にばらつきがあるが、技術的水準は均質的。

②朝顔形円筒埴輪 (朝顔形埴輪)

A類：凹線技法による突帯設定と上下に三角形の透かし孔を有するもの。少数存在。

B類：薄い器壁で頸部に突帯を有し、定型的なプロポーシオンをなすもの。

C類：分厚い器壁で方形刺突技法による突帯設定をなすもの。

突帯の形状及び頸部突帯の有無で a～c に細分ができる。

③二重口縁壺形埴輪

Aa類：底部があまりすぼまらずにずん胴形の形態を呈するもの。

Ab類：底部がすぼまり胴部が倒卵形を呈するもの。

B類：頸部が太くて、くびれが少ない形態のもの。

ただし、底部の穿孔形態についてはバリエーションが多い。

(古谷)

沖出古墳の場合、器財形埴輪が少ない反面、土器系埴輪 (円筒形・壺形) が多く、とくに壺形埴輪が目立っているという特徴がみられます。また、沖出古墳では埴裾部から円筒埴輪の埴輪列が検出されているようですが、九州地方では埴裾部に埴輪を巡らす事例が少ないという報告もありまして、この点も特徴的といえるでしょう。そこで、埴輪の組成の検討に入る前に、まずは古墳に埴輪を巡らすことの意味、配列の問題について考えてみたいと思います。

(田中)

沖出古墳では埴頂部に埴輪列を巡らしていたと推定されていますが、調査で埴輪列が確認されたのは南側くびれ部付近の埴裾部のみで、本来、埴裾部についても全周するのか不明です。南側くびれ部付近のみの配列の可能性もあります。

埴裾部に埴輪を配列する古墳としては、九州地方では鋤崎古墳がありますが、こちらは前方部の配列が特徴的で埴裾部に沿わない位置に埴輪が樹立されていて、きれいに埴裾部を全周するというわけではありません。

(古谷)

墳裾部のくびれ部付近というのは、一つのポイントとなる気がします。例えば、先ほど愛知県の青塚古墳を例示したのですが、特定の場所に円筒形の埴輪を配置するというような傾向は、沖出古墳ではみられるのでしょうか。円筒形の埴輪がくびれ部に集中するような傾向があるのか、それとも墳丘上にもまんべんなくみられるのか、教えてください。

(松浦)

報告書作成の時に、埴輪の出土位置を検討しましたが、円筒埴輪については特定の場所に集中するような傾向は認められませんでした。ただ、全体的なところでは、南側に大振りな埴輪を積極的に配置するという傾向はうかがえました。また、沖出古墳では、円筒形の埴輪より壺形埴輪の一部に顕著な傾向が認められ、とくに単口縁タイプの壺形埴輪が北側前方部に集中する傾向がうかがえました。

(古谷)

壺形埴輪の説明の中で二重口縁タイプと単口縁タイプの使い分けがみられるというお話がありましたが、こうした埴輪の配列について犬木さんか田中さんにコメントをお願いしたいと思います。

(犬木)

埴輪の配列について、先ほどの私の発表の補足を含めてコメントします。沖出古墳が造られた時期は、石山古墳（三重県伊賀市）や柳本古墳群、渋谷向山古墳〔景行陵古墳〕（奈良県天理市）などのように近畿地方においては、すでに前方後円墳の片側に造り出し部的なものが、出現している時期にあたると思いますので、通常円筒埴輪列以外に、墳裾部の一部に埴輪を配列するという行為は、近畿地方の古墳にみられるそうした情報を何らかのかたちで入手していたのではないかと、という印象をもっています。



(古谷)

九州地方では、近畿地方の古墳の影響を受けたと思われるような古墳は、沖出古墳以外にもありますか。

(田中)

沖出古墳に近い時期であれば、亀塚古墳（大分県大分市）があります。造り出し部が造成され、周囲を円筒埴輪で囲み、内側には家形埴輪が配置されていました。ほかには、70m級の帆立貝式古墳で入津原丸山古墳（大分県豊後高田市）などがあり、時期が下れば、類例はさらに増加すると思います。

(古谷)

参考までに述べておくと、例えば柳井茶臼山古墳（山口県柳井市）では、墳丘上には後円部に畿内の円筒埴輪、それ以外には在地的な埴輪を並べているのですが、造り出し部に埴輪はみられません。必ずしも造り出し部には埴輪を配置するということではありませんので、そのような事例の一つとして紹介しておきたいと思います。

(犬木)

沖出古墳の時期からは少し遡りますが、東殿塚古墳（奈良県天理市）では前方部側面の中段に集中して円筒埴輪や朝顔形埴輪の配列がみられます。沖出古墳や鋤崎古墳のように明確な造り出し部がみられない古墳の場合でも、前方部からくびれ部を重視するようなルーツはそのようなところに求められるのではないかと考えています。

(古谷)

東殿塚古墳から時期は下りますが、赤土山古墳（奈良県天理市）ではくびれ部に複数の家形埴輪を用いた祭祀的な部分が見つかっています。どの種類の埴輪を重視するのかということについては、それぞれの古墳で異なるわけですが、沖出古墳にみられる南側を重視し、埴裾部のくびれ部に円筒形の埴輪を配列するという行為も、近畿地方以西の西日本の有力古墳にみられる埴輪の配列と通底するものがあると考えてよさそうですね。

では、そのことを踏まえて、どのような埴輪をどの場所に置くかという「配置」について、これは埴輪の性格にも関わることなので、もう少し掘り下げてみたいと思います。沖出古墳では残念ながら具体的な配置を知ることは難しいということでしたが、九州地方の他の古墳ではどのような状況なのでしょう。

(犬木)

老司古墳では、大多数の壺形埴輪に対して円筒埴輪がごく少量みられるのですが、円筒埴輪は後円部のみに配置されており、壺形埴輪よりも重視されていた可能性があります。

(田中)

円筒埴輪が量的に主体を占めるのは、鋤崎古墳や亀塚古墳ぐらいで、基本的には九州地方の古墳は壺形埴輪が主体です。老司古墳もそうした古墳の一つだと思いますが、円筒埴輪の配置は特徴的で、埴頂部ではなく石室入口付近や1段目のテラス部分にわずかにみられるのみです。

(古谷)

そうすると、九州地方では壺形埴輪が量的に主体を占める古墳が多い中、沖出古墳は円筒埴輪が一定の割合を含んでいることが発掘調査で分かっていますので、再度の確認ですが、調査時の出土状況などについてお話をお願いします。

(上野)

南側くびれ部で確認されました埴輪列は、円筒埴輪と朝顔形埴輪で構成されていました。平野側からの見通しがきく南側を意識して、くびれ部の埴裾部に埴輪列が置かれた可能性が高いと考えています。前方部のテラス面などでは、テラスの幅が狭く地山がすぐに出てくる状況で、埴輪列は確認できませんでした。

(松浦)

沖出古墳の埴輪を再整理した時に各器種の割合を調べたのですが、器形が分かる資料約250点を抽出して割合をみたところ、円筒埴輪が36%、朝顔形埴輪が25%、壺形埴輪が39%となりました。この割合が、古墳の実態をどの程度反映しているのか、心許ないところもありますが、円筒埴輪に対する朝顔

形埴輪の割合の高さは、注目できるかと思います。

(古谷)

沖出古墳の埴輪の配置・配列について、少しイメージがつかめるお話であったかと思います。では、次に埴輪の組成と性格のことも含めて、田中さんと犬木さんにそれぞれコメントをお願いします。

(田中)

犬木さんのお話で、壺形埴輪の底部のつくりが壺の形態に比べて多様であるという指摘があったかと思いますが、私が以前調査をした勘助野地古墳や現在、調査中の重政古墳（大分県豊後大野市）も同様に、底部の穿孔が実に多様であることがうかがえます。

(古谷)

沖出古墳の円筒埴輪は製作技術に均質性が認められるのに対し、壺形埴輪には多様性があり、対称的な様相がみられます。同じ土器系の埴輪なのですが、それぞれの役割・性格が異なっていたのではないかと考えられます。

(犬木)

壺形埴輪の多様性については、単純に製作に携わる人が多かったという点が指摘できると思います。ただ、それだけではなく、円筒埴輪の場合には、基本的に形態的画一性を志向しており、見かけ上の均質性を保つために一定の技術管理を行いやすかったという可能性はあると思います。古墳時代中期の円筒埴輪においてはその傾向はさらに強くなります。

とはいえ、沖出古墳の円筒埴輪についても、畿内地方のものと比較すると技術的な違いは明らかであり、細かく見ればそれぞれ形態上のばらつきがあります。円筒埴輪のごく一部に畿内的なもの（普通円筒埴輪A類）が存在しているというのが、沖出古墳の埴輪の特徴だと思います。

(田中)

朝顔形埴輪の場合は、犬木さんの分類でB類が畿内的、A類とC類は在地的という理解でよろしいですか。

(犬木)

沖出古墳の朝顔形埴輪と壺形埴輪の中には共に重量感のあるものがありまして、朝顔形C類については、そうした壺形埴輪との関りが深いものとして理解してよいと思います。朝顔形A類については、突帯の貼り付けに凹線技法が用いられているという点で、他とは異なる資料として分類したものです。朝顔形A類は、形が分かる資料がありませんので、壺形埴輪との関係については現状では不明です。

朝顔形埴輪については、畿内的なB類が一定量あるわけですから、全体をB類で統一して製作しても良さそうなのですが、あえて統一していない点は、興味深いところです。

(古谷)

ありがとうございました。沖出古墳の埴輪については、今後、さらに分析が進めば、地域の人々が、どのように古墳の築造に関わっていたのかを検証できる稀有なケースになるのではないかと考えています。

3. 沖出古墳の歴史的位置について

(発表4：田中資料の補足)

(田中)

・沖出古墳の立地の特徴について

沖出古墳の舟形石棺の類例として、佐賀県唐津湾の沿岸部に位置する谷口古墳の石棺以外に大分県大野川上流域にある御祖神社（大分県竹田市）の石棺などが中期初頭のものとして挙げられますが、このように九州地方の内陸部にいち早く石棺が出現することをどのように理解すべきなのかということと考えた場合、例えば、時期は下りますが、中期後半の事例として、福岡県遠賀川流域に位置するきょう塚古墳（福岡県飯塚市）の縄掛突起を有する箱式石棺の類例が、大久保3号墳（大分県豊後大野市）でもみられますし、あるいは、古墳時代後期には次郎太郎古墳群（福岡県嘉麻市）から出土した須恵質の壺形土器の類例が、大分県日田盆地の朝日天神山1号墳（大分県日田市）で見られるといった事例を合わせて考える必要があるかと思えます。

このような事例を踏まえると、古墳時代前期のある時期から古墳時代を一貫して、海上交通ルートに併行するかたちで、内陸を結ぶ山沿いの交通ルートがあったのではないかということ想定する必要があります。かつて、初期横穴墓の伝播についても南九州地方からの内陸ルートが想定されていましたが、具体的な中身は示されていませんでした。しかし、宮崎県北部から福岡県遠賀川流域を結ぶこのような山沿いの交通ルートを想定することで、初期横穴墓の伝播についても理解が得やすくなるのではないかと思います。しかし、律令国家以後は、このような山沿いの交通ルートは、国境によって分断されていくようです。

(古谷)

いよいよ、最後のテーマとなりますが、福岡県の遠賀川流域における沖出古墳の位置付けについて確認したいと思えます。まず、遠賀川流域の首長系譜ですが、沖出古墳と比較すべき古墳として、響灘にそそぐ遠賀川河口域の豊前坊1号墳（福岡県遠賀町）があります。また、沖出古墳より時期がさかのぼるため田中さんの発表では触れられませんでした。壺形埴輪が出土している宗像地域の東郷高塚古墳（福岡県宗像市）も沖ノ島祭祀に関わる重要な古墳として留意しておく必要があるだろうと思えます。まず、東郷高塚古墳について、田中さんコメントをお願いします。

(田中)

東郷高塚古墳については、しばしば近畿地方の前期古墳で見られるような大型の壺形埴輪が出土していることや円筒埴輪がみられないことなどから、沖出古墳の時期よりも一段階古い時期の古墳と考えています。また、東郷高塚古墳の立地については、当時は玄界灘に面する海浜部に位置していたと考えられますので、沖出古墳の前段階に有力古墳が遠賀川河口周辺の海岸部で出現しているわけですが、そのうちのひとつと考えてよいだろうと思えます。

(古谷)

東郷高塚古墳は沖出古墳や豊前坊1号墳の一つ前の世代と位置付けることができるということですね。次に、石製品の分析などから玄界灘の沖ノ島祭祀遺跡との類似性、遠賀川流域から海路へのアクセスということが指摘されていましたが、この辺りのことについてこれまでの議論を踏まえて沖出古墳の性格を再度考えてみた場合、どのような評価ができるのか、いま一度、清喜さんにコメントをお願いします。

(清喜)

腕輪形石製品は、古墳の被葬者となる人物が生前に自ら望んだだけで入手できるような器物ではなかったと思います。沖出古墳の被葬者は、埴輪の議論からもおそらく、畿内地方の様式をある程度導入できるような立場にあったことが推察されますので、石製品も同じような脈絡でとらえられるのではないのでしょうか。

(古谷)

そうすると、どのような被葬者像が描けるのですか。例えば社会的役割などはどうなのでしょう。

(清喜)

沖出古墳の時代は大陸との対外交渉が活発化する時期にあたりますが、そうした中で沖出古墳の被葬者は対外交渉の最前線に立つ人物というよりは、祭祀の面で後方支援をするような人物像を想定する方が良いように思います。例えば、近畿地方では埴輪の議論で取り上げられた三重県の石山古墳の石製品の様相をみても、量的な違いはあるのですが、構成要素は沖出古墳と類似していますので、おそらく石製品を大量に副葬する近畿地方の古墳の被葬者と性格上の共通性はあるのではないかと思います。

(古谷)

副葬品を入手するときの契機に関する被葬者の性格ということになりますね。では、埴輪の面からみるとどうでしょうか。犬木さん、お願いします。

(犬木)

今回、埴輪の分析の中でハケメの話をしたのですが、そのことについて少し補足しておきたいと思います。朝顔形埴輪の中にも在地的なもの(C類)があって壺形埴輪とハケメが共通するという点は、想定範囲内だったのですが、それ以外に、在地的な朝顔形埴輪(C類)と畿内的な円筒埴輪(A類)との間や家形埴輪との間にもハケメの共通性が判明した点は、非常に特筆すべきことと思います。

また、沖出古墳の埴輪の特徴である「畿内的な形」と「在地的な形」の埴輪が共存するという点に注目すると、例えば宝塚1号墳や、時期は少し下りますが、堂山古墳(静岡県磐田市)のように系統の異なる二群の埴輪が同じ古墳にみられる状況が全国的にも少しずつ確認されるようになってきておりまして、「畿内的な形」と「在地的な形」という両者をあえて統一せずに同一古墳内に共存させるという行為を、九州地方あるいは日本列島規模で、広い脈絡の中でとらえていく必要があると感じています。

(古谷)

それでは、お二人の感想を踏まえて、総括的に田中さんの方からご意見をいただきたいと思います。

(田中)

私の話の中で交通路のことについて触れましたが、まず、古墳時代前期前半の九州地方はいわゆる「博

多湾貿易」が中心で、例えば、大分県日田盆地についてみると、博多方面の影響を受けている文物が福岡県筑後川流域を経て入ってきているわけです。ところが、小迫辻原遺跡（大分県日田市）が衰退した前期中頃以後は、どちらかという福岡県遠賀川流域、豊前地域などの影響が徐々に増していきます。

こうした状況を考えると、沖出古墳が造られる時期に福岡県の玄界灘から遠賀川を遡って豊後（大分県）、阿蘇（熊本県）、日向（宮崎県）に抜ける内陸交通路が重要な意味をもつようになり、ちょうど沖出古墳の位置が水路と陸路の結節点となっていたのではないかと考えています。沖出古墳に玄界灘沿岸地域や畿内地方との交流の影響がみられるのは、このように考えると理解しやすいのではないかと思います。似たような事例として、東の海路では大分県別府湾岸が中継地として重要な位置をなしており、猫塚古墳や亀塚古墳の大型古墳が沿岸部に築かれています。

古墳時代前期のある時期に交通路の大きな変動があって、その一つの現象として沖出古墳が出現するのだろうと考えています。

（古谷）

交通ルートの問題は、なかなか検証が難しい面がありますが、遠賀川上流域に沖出古墳が造られることの意義、歴史的評価を行う上で、重要な視点だと思います。今後、各地域の土器やそのほかの文物を検証していくことで、そのような交通ルートの存在についてもよりはっきりとさせることができるような展望をもったお話でもあったかと思います。

ここで、座談会も終わりの時間となりましたので、最後にこのような機会を提供いただきました嘉麻市教育委員会の上野さんと松浦さんに、それぞれ感想も含めてコメントをお願いしたいと思います。

（松浦）

今回の企画につきましては、古谷さんや犬木さんが主宰されている柳井茶白山古墳研究会が沖出古墳の埴輪を調査されている中で、その調査成果を一般の方にも広く知ってもらえるとありがたいというところから立ち上がった話でした。発表テーマを決めるにあたっては、まず、犬木さんには沖出古墳から大量に出土した埴輪、清喜さんには副葬品として特色のある腕輪形石製品とを取り上げていただくことにしました。それから、田中さんには北部九州地方の東側からの視点で沖出古墳を総合的に評価して欲しいというお願いをさせていただきました。これは、北部九州地方の考古学では、どうしても「伊都国」、「奴国」の領域である玄界灘沿岸部、西側中心の視点で遠賀川流域の古墳も評価されることが多いからです。



松浦 宇哲 氏

今回の座談会の中では、とくに田中さんが沖出古墳を交通路の結節点と位置付ける内陸ルートの可能性を説かれたことについて興味をそそられました。というのは、現在、沖出古墳は国道 211 号線のすぐ脇に位置していますが、このルートは近世においてはいわゆる「日田往還」と重なっています。実は、このルート沿いにはユニークな遺跡がほかにも点在しておりまして、古墳時代においては、外来系の古式土師器を大量に含む方形環溝遺構が確認された穴江・塚田遺跡（福岡県嘉麻市）、宮崎県地方にみられ

る墓制である地下式横穴墓が発見された岩崎地下式横穴墓（福岡県嘉麻市）などもみられます。こうした遺跡の分布からみても、田中さんのお話は、仮説の段階ではありますが、十分にうなずけるお話であったと思います。

（上野）

私は沖出古墳の発掘調査の機会に恵まれて、古墳公園の整備まで携わることができました。今回の座談会に参加する中で、沖出古墳に対する皆さんのお話を聞き、新しい見方や考え方を知ることができ、大変うれしく思います。今後は、座談会の成果も取り入れながら、沖出古墳の活用にも努めていきたいと思っています。

本日は、お忙しい中、長時間にわたりご参加いただきまして、ありがとうございました。

（古谷）

今年（令和2年）2月22日に開催予定だった沖出古墳のシンポジウムが、新型コロナウイルスのために直前の前日に中止になるというアクシデントに見舞われたのですが、皆さまのご協力でその代替である座談会をこうして催すことができましたこと、心から感謝申し上げます。

それでは、これをもちまして座談会を終了させていただきます。ありがとうございました。

○ 講師の紹介 ○

古谷 毅 (ふるや たけし)

1959 年生。國學院大學大学院 博士課程後期(満期退学)、現在、京都国立博物館学芸部考古室主任研究員。古墳時代の金属器・埴輪・文字資料や考古学史などを中心に研究している。

近年の著書等:『別冊太陽 古墳時代美術図鑑』日本のこころ246(2016年)の監修など

犬木 努 (いぬき つとむ)

1966 年生。東京大学大学院人文科学研究科博士課程修了、現在、大阪大谷大学歴史文化学科教授。毎年、宮崎県西都原古墳群の発掘調査や大阪府一須賀古墳群の測量調査を行っている。近年の著書等:「埴輪のトポロジー」『論集他界観』(2016年)など。

田中 裕介 (たなか ゆうすけ)

1959 年生。岡山大学大学院文学研究科修士課程中退、現在、別府大学文学部史学・文化財学科教授。大分県をフィールドに毎年、前方後円墳を発掘調査して古墳時代を研究している。

近年の著書等:「速津媛伝承と別府の古墳群」『大分県地方史』231(2017年)など。

清喜 裕二 (せいき ゆうじ)

1968 年生。早稲田大学大学院文学研究科修士課程修了、現在、宮内庁書陵部首席研究官。

古墳時代の人々の世界観について、考古資料や『古事記』などの文献から読み解きたい。

近年の著書等:「沖ノ島の滑石製品」『世界のなかの沖ノ島』季刊考古学別冊 27(2018年)など。

古代史シンポジウム

『徹底解剖！ 沖出古墳とその被葬者像』

ーオンライン座談会の記録ー

令和3年3月12日

編集/発行 嘉麻市教育委員会

福岡県嘉麻市上臼井 446 番地1

印刷 マツオ印刷株式会社

福岡県嘉麻市上山田 1338 番地9